

バレーボール学会 10周年記念 特別企画

- 1) バレーボール研究・学会 10年の歩み
- 2) 諸外国のバレーボール事情と日本の普及発展の方策を探る

本学会は1996年5月25日「バレーボール研究会」として早稲田大学体育局において設立総会が開催され誕生しました。その後、1999年3月21日開催の第4回定期総会において「バレーボール学会」と名称を変更し、本年度が設立10周年の記念すべき年にあたります。

そこで、10周年の記念行事として三つの事業に取り組むことになりました。一つ目は、「Thinking Volleyball バレーボール100Q入魂」を記念出版すること。二つ目は、記念研究大会並びに記念式典を開催すること。そして、三つ目は機関誌第7巻に特別企画として「バレーボール研究・学会10年の歩み」と「諸外国のバレーボール事情と日本の普及発展の方策を探る」をテーマに取り上げることです。

「バレーボール研究・学会10年の歩み」の方は枋堀申二会長に原稿を依頼し、10年間の学会の歩みを総括して頂き、そして今後進むべき方向性を示して頂きました。また、「諸外国のバレーボール事情と日本の普及発展の方策を探る」の方は以下の趣旨に沿って編集作業を進めました。

我国のバレーボールは過去において、女子は'64東京・'76モンテリオール五輪と2度にわたり金メダルを獲得し、男子は'72ミュンヘン五輪で金メダルを獲得しています。しかし、近年男子は3大会連続して五輪に出場できず、女子は2大会ぶりに出場したアテネ五輪では残念ながら5位に終わっています。現在、世界の男子バレーボールは世界選手権・ワールドカップ・アテネ五輪と3冠のブラジルを中心にアメリカ・キューバの中南米諸国とイタリア・ロシア・フランス等のヨーロッパ諸国が競い合い、レベルが非常に高くなっています。一方、女子はアテネ五輪優勝の中国を頂点に、ロシア・アメリカ・ブラジルの4強が凌ぎを削っています。このように日本のバレーボールを取り巻く環境は非常に厳しいものがあり、日本国内だけでバレーボールを考えていては、ますます世界から取り残されていく状況にあると思います。

そこで、編集委員会では、諸外国の事情に詳しい6名の指導者に原稿を依頼しました。今回執筆頂いた方を簡単に紹介しますと、まず①'02世界選手権の準優勝チームのアメリカを川北元・吉田敏明両氏に、②現在カナダ女子ナショナルチームとウィニペグ大学を指導されている宮下直樹氏（元朝日生命）にカナダを、③アジア枠でアテネ五輪に出場したオーストラリアに留学されていた吉田清司氏にオーストラリアを、また④ヨーロッパの事情に精通されている足立龍哉氏（FIVB公認コーチインストラクター）にフランスを中心に、最後に⑤セリエAでプレーされていた真鍋政義氏にイタリアと、それぞれ経験豊富な方々にご担当して頂きました。ご執筆頂いた方々には本当にありがとうございます。紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。最後に、この10周年記念特別企画が日本バレーボール界の発展に寄与できることを念じてやみません。

（編集委員長 柏森康雄）



バレーボール研究・学会10年の歩み

析堀 申二*

バレーボール学会会長
(筑波大学名誉教授)

はじめに

バレーボール研究会として発足したバレーボール学会も今年で十年目を迎えることになった。バレーボールに強い思いを寄せ、このスポーツをこよなく親しんでいる有志が集い研究会を旗揚げしたのである。

会員各位のバレーボールにかける情熱や積極的な日常指導活動、研究活動に支えられ、多大な実績を積み重ね、初期の目標を成し遂げつつあることに感謝申し上げ、ここに十年間の歩をまとめることにした。

1. バレーボール研究会発足の機運

1981年7月6～20日の間、山梨県河口湖畔でFIVB¹⁾主催による国際公認バレーボールコーチクリニックが開催された。東京オリンピック後、我が国で二度目のコーチクリニックの機会であった関係から、バレーボールを理論的に学びかつ公認コーチの資格を得ようと国内はもとより世界各地から多くのバレーボール関係者が集ったのである。

FIVBによる英文の“coaches manual”をテキストに、理論と実技が連日実施され、夕食後は各国の参加者がそれぞれのテーマについて熱心にディスカッションが行なわれた。

テキストには、ホルスト・バーケ、ユーリー・チェスノコフ、エンダー・ホルベイ、ビル・ネビル、池田久造、松平康隆、豊田博等の諸氏が執筆した理論を学び、バレーボールの歴史、FIVBの起りと組織・活動についても学習した。実技としては基礎、応用技術の解説と練習の組立て、ゲーム戦術・戦略と多岐にわたる内容をプログラムとして計画したのである。

著者はこのクリニックのオーガナイザーの任にあたった。河口湖町の方々の協力と支援をいただき富士登山実施、バーベキューや花火大会、地元太鼓の競演による歓送会等を企画し、バレーボールを通して国際交流と親善の環も広がっていった。

クリニック参加者には最終日に実技テスト及び理論テストが課せられることになっていて、参加者は連日予習・復習に追われる日々であった。言う迄もなく国際公認コーチクリニックは英語によって実施されていた。

これを機にバレーボールを通じて国際感覚を醸成したい、バレーボールを科学として学びたい、バレーボールを文化として位置づけていきたいという仲間が結成された。この有志たちは1982年～1984年の間毎年クリニックに止泊した河口湖の宿に集い、バレーボールの今後について語り合い、各々の抱く思いを交し合ったのである。バレーボールを研究対象として深めていきたいと願う機運は、高まっていった。

2. バレーボールをめぐる状況の変化

1895年ウィリアム・G.モルガン氏によって考案されたミントネットは、翌1896年バレーボールと命名され、YMCAの活動によって世界各国に伝えられていった。

FIVB(国際バレーボール連盟)は第二次世界大戦後の1947年フランスのパリに本部を設け14ヶ国の加盟により結成された。バレー界にとっては初めての国際的組織であり、1949年FIVB主催による第1回世界選手権大会が開催された。

バレーボールが国際化された当初は、ソ連(ロシア)を頂点とした東ヨーロッパ諸国はこのバレーボールに国を挙げて取り組み、高い競技レベルを示していた。

1951年日本はFIVBに加盟した。日本のバレーボールは²⁾極東式バレーボールとして1913年F. H. ブラウン氏の手ほどきを得て普及発展してきた。

この極東式バレーボールによって培われたリソース(resource=資源)を基盤とし、日本の女子バレーは早くから国際舞台での活躍に切り替えて6人制に取り組んだ。その成果は東洋の魔女と称賛され、世界の王座を競うところとなったのである。

1964年オリンピック東京大会でバレーボールが正式種

*バレーボール学会 会長 筑波大学名誉教授

¹⁾Federation International Volleyball

²⁾極東大会で実施されていた。1913～1919年16人制、1921～1925年12人制、1927～1935年9人制。アメリカやヨーロッパでは国際式6人制。

目として採用になって以降は、オリンピックをバレー界の最高のイベントとして、各国が力を注ぐことになっていった。

日本男子バレーも1972年オリンピックミュンヘン大会で金メダルに輝き世界の頂点に立った。日本の男女バレーボールが全盛時代を迎えたといえよう。

1970年代の日本、ソ連の時代から、1980年代には、アメリカ、ブラジル、中国、キューバが加わり、1990年代には西ヨーロッパの各国が台頭し実力をつけるにしたがい日本のバレーボールとの溝の差は広がっていった。

“俺についてこい”“成せばなる”“負けてたまるか”“回転レシーブの開発”“コンビネーション戦術の構築”“一人時間差の開発”等が当時世界をリードした要因といえよう。

しかし世界のトップを目論む国々のバレーボールは、スポーツ科学の研究やその成果の応用に立ったコーチング手法を構築したのであった。加えて情報の収集、分析、処理といった分野の充実、専門トレーナーの導入等が見られるようになったのである。

根性論、経験論、何々流の指導論等といったものだけに頼っていては最早オリンピック出場も適わなくなったといえるのである。加えてバレーボール人口が年々減少してしまった。

1984年まで続いていた有志による研究仲間の集いも、河口湖畔の宿が使えなくなってしまい中断してしまっていたのであった。

折角盛り上っていた機運も少し冷えかかっていたが、今こそチャンスと判断し、是非活動母体を組織として実施すべく有志が再び集ったのである。

3. バレーボール研究会発会に至る経過

研究会設立に向け、具体的活動がはじまった。

1. 1995年6月5日(月) 18:30~(池袋)

有志世話人として朽堀申二(現会長)、矢島忠明(現副会長)、遠藤俊郎(現理事長)の三人で、バレーボール研究会についての第1回目世話人による話し合いを行った。

- ① 研究会結成の趣旨について
- ② 研究会の目的について
- ③ 研究会の事業について
- ④ 研究会の組織について
- ⑤ 研究会発起人について
- ⑥ 研究会役員構成について
- ⑦ 研究会会員について
- ⑧ 研究会運営方針について
- ⑨ 研究会について
- ⑩ 会費について

等について意見交換を行い具体的に原案としてまとめることにした。

2. 1995年8月4日(金) 13:00(早稲田大学)

バレーボール研究会(仮称)第1回発会準備会

(朽堀、矢島、遠藤)

- ① 研究会の趣旨、目的、事業について
- ② 組織の構成
 - ・発起人について
 - ・会員への呼びかけについて
 - ・運営方針について

等について検討を加えた。

3. 1995年11月1日(土) 14:00~(早稲田大学)

バレーボール研究会(仮称)第2回発会準備会

(朽堀、矢島、遠藤)

- ① 会則について
- ② 役員について
- ③ 第1回研究会開催について

等について原案を基に検討がなされた。

4. 1996年2月10日(土) 13:00~(早稲田大学)

バレーボール研究会(仮称)第3回発会準備会

(朽堀、矢島、遠藤)

- ① 役員構成について
- ② 会員について
- ③ 第1回研究会について
- ④ 会員予定者名簿の作成

より多くの会員が参加し、自由に主体的に活動できる会の有り方を模索し検討を加えた。

5. 1996年3月27日(水) 13:00~(早稲田大学)

バレーボール研究会第1回総会、研究会準備委員会

(世話人代表を含め発起人全員の出席)

第1回~第3回発会準備委員会で検討したバレーボール研究会の大枠が作成され、ここに第1回目のバレーボール研究会、総会に向けての具体案が精査検討され承認された。

6. 1996年5月17日(金) 18:00~(山梨)

バレーボール研究会設立に向けての最終打ち合せ会

(朽堀、矢島、遠藤)

バレーボール研究会総会を1996年5月25日(土) 12:00時より早稲田大学体育局で開催することとし以下の事柄を確認した。

- ① 基調講演演者 朽堀申二
(バレー研究会世話人代表)
- ② 記念講演演者 水谷 豊(桐朋学園大学)
- ③ 記念講演演者 大倉俊彦
(日本バレーボール協会監事)
- ④ 総会の進行と役割について
- ⑤ 発会記念レセプションの司会、進行について
- ⑥ 各役割担当者とその任務について

以上の点について交渉結果の確認と総会の進行と役割についても確認された。

4. バレーボール研究会発会

1996年5月25日バレーボール研究会は早稲田大学体育局において発会総会が開催され誕生をみたのである。

研究会の趣旨、目的については基調講演「内外のバレーボールの動向と今日の課題」に見ることができる。ここにその内容を示すことにする。

1. 先人の歴史に学んで

1913年 F.H. ブラウン氏によって我が国にバレーボールが伝授され八十余年、今年バレーボール誕生百一年目を迎えます。

1917年第3回極東選手権大会が東京芝浦で開催され、日本、中国、フィリピンの3ヶ国が参加、これが我が国の国際大会初出場となったのです。しかし、その後の極東大会での日本男子チームの実力は、全く他と比ぶべきものではなかったのです。

1927年7月、大日本排球協会が設立され、この年の8月には大日本排球協会関西支部より機関雑誌「排球」が創刊されました。その発刊の辞に、当時28歳の西川政一氏は次のように記しています。

長き惰眠の夢より醒めてやまとたけるのをのこは起てり!!

聴け、天空にこだまする首途(かどで)の雄叫(をたけ)び!!

視よ、大地にきざみゆく躍進のあゆみ!

西川氏の願いは更に続くのです。「…、内を顧みれば寂寥々(じゃくりょうりょう)あるかなきかの不振の歎き、外に思いを馳せるとき、そこには血涙にじむ記録の数々…、それは余りにも臍甲斐なく、余りにも悲痛な事実ではなからうか。」

バレーボールに携わる者に対しては、「不惜身命(ふしやくしんみょう)の努力と、勇猛不退転の意気とを傾倒し、排球界の真価を研覈(けんかく=研究と同じ意)し、排球界の種々相に鋭い批判論評のメスを加えんとす。」

機関雑誌「排球」発刊の持つ意義については以下のように述べられています。

「かくて本誌をして斯界のフォアラナー(Forerunner=先駆者)たらしめんことを期す。」

前途を思い使命を切実に感じとった関係者たちは、「ついに漫然たる黙視を許さず、文筆の力を籍(か)りて斯技の前途に邁進せんことを期す。」

若き先人たちの新しいスポーツ、バレーボールに取り組もうとする熱と意気とを読み取ることができるのです。

2. 実を結んだ9人制全盛期

バレーボールに思いを抱いた多くの関係者の切磋琢磨の努力は、1934年マニラでの第10回の極東選手権大会で国

際試合初勝利を中国から挙げ、女子においては1923年大阪での第6回極東選手権大会のエキシビジョンゲームに初参加し初優勝、以後第8回、第9回の極東選手権大会優勝と輝かしい成績を収めたのでした。

一方国内では、1920年代に様々な国内大会が開催されるようになり、それと相い互いして、師範学校、専門学校、大学、高等学校、高等女学校、中学校など、学生を中心としたクラブが1920～1930年代に続々と誕生しました。

1926年5月27日に「学校体操教授要目の改正」の中にバレーボールが球技種目として教科目として初めて入ったのである。小学校6年男子、中学校3年生、高等女学校3年生にそれぞれ配当されたのです。学校の教材として、青春の若き血おどるクラブ活動として、また企業におけるレクリエーションとして全盛を極め、バレーボールの技術、戦術、指導方法の確立を著した専門書が競って刊行され、国内のバレーボールの普及発展に寄与したのである。

極東大会の参加を通して、いわゆる三段攻撃の基本はフィリピンから学び、また速いトス回しや、速攻は中国を手本として技術的、戦術的水準を高めてきたのである。

1924年11月大日本体育協会主催による全日本総合選手権大会、のちにこの大会は1927年に大日本排球協会設立にともない総合男子、総合女子の二種別大会として大日本排球協会の手によって行われ、のちに中等男子、中等女子を加え1942年まで13回を数えたのです。

この2つの大会を頂点として年々歳々激しい競い合いと、技術、戦術の向上は著しい進歩を遂げていきました。これに加えて、1932年に関東に、1933年関西にそれぞれ学生排球連盟が結成され、9人制バレーボールの全盛期を迎えたのです。

3. バレーボールの国際化と6人制バレーボール

1945年太平洋戦争が終結、日本全土が廃墟と化し、人々は生きる目標を失いかけた。この年早くも日本排球協会、関東排球協会復活への始動が芽生えたのです。1946年全日本総合選手権大会兼第一回国民体育大会、関東大学リーグ戦が再開され、スポーツを通して沈廃した日本人の心に、明るい希望と夢をあたえることになったのです。

1947年国際バレーボール連盟が設立され、1949年には第1回世界選手権大会がスタートしました。1947年14ヶ国で出発した国際バレーボール連盟の加盟国も、1951年日本が加盟した年には30ヶ国となり、現在その数は210ヶ国を越えるほどの大組織となったのです。伝来の9人制(極東式バレーボール)に加え6人制(国際式バレーボール)の導入について激しい国内論議が展開されましたが、それぞれの持つ特性を生かした今日の姿に定着したのでした。

ソ連を中核とした東ヨーロッパ陣と、アジアの9人制の持つ多くのリソースを生かしたコンビネーションバレーが二大勢力として1980年まで世界を支配してきました。

しかし、北米、南米、西ヨーロッパ諸国がバレーボール

に本格的に取り組むや、彼らの持つスポーツ科学の知識、徹底した合理的トレーニングシステム、情報収集能力とその分析技術、プロフェッショナルプレーヤーとしてのより高い意識、それらを育成していく機能的システム作り等々、急激に変化してくる状況にいち早く対応しなくては、私たちの愛してきたこのバレーボールに未来の展望は開かれたいのではないかと、いささか不安を覚えるのです。

4. バレーボールに携わる多くの方々へのエネルギーの結集を

我が国のバレーボールは学校体育として、課外の部活動として、また、職場スポーツとして、さらには企業に支えられた高レベルのバレーボール部の活動により育てられてきました。今日では生涯スポーツの使命を持ったサービストゥール (Service-Tool) として、地域に根ざしたコミュニティスポーツとして、国際舞台で競われるチャンピオンスポーツとして、Vリーグにみるプロスポーツとしてバレーボールは多岐にわたってその活動領域を広げているのです。

この競技には豊かな経験も大切です。これに科学的研究成果のメスを加え、分析し、実証を試み、お起きの情報を取捨選択し、新たな技術開発と戦術の構築をしなくてはなりません。

このことのためには合理的トレーニング処方、メンタルトレーニングの充実、メディカルチェック、コンディショニングに関しての有効な手だて、タレントプレーヤーの計画的系統的養成システムの確立、トレーナーや研鑽を積んだコーチの育成などに科学的に取り組まなくてはなりません。

また学校体育における教材としてのバレーボールがいかに関心され、楽しく取り組めるものとするかの方法論の確立、部活動、クラブ活動のあり方等々、私たちのまわりには多くの課題が解決を待っているように思えるのです。

バレーボールに関する研究志向は確かに高まってきています。バレーボールの専門誌、機関誌の誌上にその成果が伝えられ、また、日本体育学会での研究発表にも研究報告が見られます。各々の大学、学校で刊行される紀要や研究論文集等にバレーボールに関する研究が見られるのです。バレーボールに関する情報の収集と発信基地として、また、バレーボールの多角的計画的な研究体制の確立のため、バレーボールに携わる多くの方々への持つエネルギーを、バレーボールの発展、バレーボール人口の増大、国際的に低下した日本のバレーボールのレベルアップ、多くの人々にバレーボールが親しまれるスポーツとして、人間の生み出したすばらしい文化として定着させていくために、皆々様のお力を集結させたいと考えるのです。

(1996. 5. 25)

5. バレーボール研究会会則と役員構成

1. バレーボール研究会会則

1996年5月25日制定

(名称)

第1条 本会は、バレーボール研究会 (The Japanese Society for Volleyball Research) と称する。

(目的及び事業)

第2条 本会は、バレーボールに関する科学研究とその発展に寄与するとともに、会員相互の情報交換、研究協力を促進することによって文化としてのバレーボールの発展をはかり、これによってバレーボールの実践に資することを目的とする。

第3条 本会は、第2条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 研究集会の開催
- (2) 会報、会員名簿の刊行、ならびにその他の出版
- (3) 研究の学際的、国際的交流
- (4) その他本会の目的に資する事業

(会員)

第4条 本会の会員は、本会の趣旨に賛同し、本会会費を毎年度納入している者をいう。

第5条 本会は特別会員の参加を認める。特別会員とは、第4条で規定した会員以外の団体及び個人で、本会の趣旨に賛同する者をいう。

第6条 会員で2ヵ年会費を納入しない者は退会したものとみなす。

(役員)

第7条 本会に次の役員を置く。

1. 会長 (1名)
2. 副会長 (若干名)
3. 幹事 (若干名)
4. 監事 (数名)

(役員を選任及び任期)

第8条 役員を選任は幹事会の議を経て、総会で決定する。

第9条 役員任期は2年とし、再任を妨げない。

(役員の実務)

第10条 本会の役員は、次の実務を負う。

1. 会長は、本会を代表し、会務を総括する。
2. 副会長は、会長を補佐し、会長事故あるときは、これを代行する。
3. 幹事は、幹事会を構成し、幹事長を選出する。また、会務を処理し、本会運営の責にあたる。
4. 監事は、本会の会務を監査する。

(会 議)

第11条 本会の会議は、総会及び幹事会から構成される。

第12条 総会は、年1回会長がこれを召集し、次の事項を審議する。

1. 役員を選出
2. 事業報告及び収支決算
3. 事業計画及び収支予算
4. 会則、会費の改正
5. その他重要事項

(会 計)

第13条 本会の経費は、次の収入によって支出する。

1. 会員の会費（会費の額は幹事会の議を経て総会で決定される）
2. その他

第14条 本会の会計年度は、毎年4月1日より翌年3月末日までとする。

(事務局)

第15条 本会の事務局は、原則として幹事長が所属する機関に置く。

(付則)

本会則は平成8年5月25日より施行する。

3) 幹事長 矢島忠明 (早稲田大学)

4) 監 事 原田 智 (立正大学)

河合 学 (静岡大学)

5) 幹 事 ◎印は責任者、○印は副責任者を示す。

①編集関係担当：

◎柏森康雄 (大阪体育大学) ○森田昭子 (東京女子体育大学)

宮沢栄作 (駒澤大学) 都沢凡夫 (筑波大学)

吉田敏明 (東京学芸大学) 山岸明朗 (日本大学)

横沢民男 (国士館大学)

②企画関係担当

◎明石正和 (城西大学) ○山本章雄 (大阪府立女子大学)

上田 実 (法政大学) 成田明彦 (東海大学)

福原祐三 (筑波大学) 前田如矢 (武蔵川女子大学)

古沢久雄 (鹿屋体育大学)

③総務関係担当

◎遠藤俊郎 (山梨大学) ○亀ヶ谷純一 (明治学院大学)

豊田 博 (千葉大学) 高橋和之 (日本女子体育大学)

廣 紀江 (学習院大学) 後藤浩史 (愛知産業大学)

黒川貞生 (東京大学大学院)

6. 研究大会、研究集会について

2. 平成8・9年度役員構成

- 1) 会 長 朽堀申二 (筑波大学)
- 2) 副会長 島津大宜 (日本女子大学)
- 川合武司 (順天堂大学)
- 清川勝行 (天理大学)

表1は、1996年第1回の研究大会から2005年第10回の記念研究大会まで、及び1996年度第1回研究集会から2004年度第1回研究集会までの研究発表テーマと発表者をまとめたものである。

表1 活動実績一覧

研 究 大 会	研 究 集 会	備 考
第1回 1996.5.26 (早稲田大学) バレーボール研究会発足基調講演 「内外バレーボールの動向と今日の課題」 朽堀申二 (筑波大学) バレーボール研究会発足記念講演-1 「バレーボール史抄」 水谷 豊 (桐朋学園大学短期大学部) バレーボール研究会発足記念講演-2 「日本における6人制バレーボールの原点」 大倉俊彦 (日本バレーボール協会監事)	第1回 1996.10.26 (早稲田大学) 「学校教育における課外活動 バレーボール部の現状について」 1. 中学生男子の立場から 東京都中学校男子チームの現状 篠原政一 (青梅市震台中学校) 2. 中学生女子の立場から 鈴木和弘 (筑波大附属中学校) 3. 高校生男子の立場から 鈴木陽一 (早稲田高等学院) 4. 高校生女子の立場から 藤生栄一郎 (筑波大学附属高校) 5. バレーボールの技能に対する「観戦」、 「プレー」の立場の違いによる魅力と 感動について 矢島忠明 (早稲田大学) 6. バレーボール選手の発育期における障 害と予防について 岡崎壮之 (川鉄千葉病院)	バレーボール研究会発足 企画委員会 編集委員会 総務委員会 の3委員会を中心に活動を 展開する アトランタオリンピック 男子出場ならず 女子9位 バレーボール研究会 ニュースレター No.1 発行 (10.31)



研 究 大 会	研 究 集 会	備 考
<p>第2回 1997. 3. 22 (早稲田大学)</p> <p>演 題 「発展途上国のバレーボール政策と現状」 クァジームスタグ アーマド (Oazi Mushtag Ahamed) (パキスタンナショナルチームコーチ)</p> <p>シンポジウム 「21世紀を目指したコーチング」 「各指導層からの提言」</p> <p>1. 中学生までの選手に対して 渡真利善 (第4砂町中学校教頭, 日本中体連 バレーボール競技部強化委員長)</p> <p>2. 大学生までの選手に対して 都沢凡夫 (筑波大学, ユニバシアード日本 男子監督)</p> <p>3. ジュニア, 実業団の選手に対して 西本哲雄 (JT, 前全日本ジュニア女子監督)</p>	<p>第1回 1997. 6. 22 (大阪：東淀川勤労者センター)</p> <p>「さまざまな目が見るバレーボール」</p> <p>1. スポーツ行政が見るバレーボールの今後 橋爪静夫 (なみはやドーム館長, 前大阪府教 育委員会保健体育課長)</p> <p>2. ジャーナリストがみる バレーボールの今後 後藤正史 (産経新聞大阪運動部)</p> <p>3. 研究動向に見るバレーボールの今後 島崎 司 (大阪教育大学教育学部教育学研究 科在学)</p> <p>4. トップレベルが見るバレーボールの今後 田中幹保 (新日鐵プレイザーズ総監督)</p> <p>第2回 1997. 11. 8 (早稲田大学)</p> <p>「バレーボールの 小学校体育への導入への試み」</p> <p>1. 行政的立場から 鈴木 漢 (文部省体育調査官)</p> <p>2. 現場指導の立場から 片野昭秀 (早稲田小学校)</p> <p>3. 研究的立場から 永島惇正 (東京学芸大学)</p> <p>4. 生理学的観点からの検討 黒川貞生 (東京大学大学院生命環境科学)</p>	
<p>第3回 1998. 3. 28 (早稲田大学)</p> <p>特別講演 「温故知新—歴史に学ぶ」 黎明期から黄金期への中国のバレーボール 孫 志安 (日中国交回復期間もない頃, 中国男子ナ ショナルチーム監督として幾度となく来日し, 日中バレーボール交流の基礎を築いた。 元中国女子5冠監督袁偉民監督を育てた)</p> <p>シンポジウム 「ルールを考える」</p> <p>1. ルールの変遷とその背景 西川友之 (富山大学)</p> <p>2. 指導者はルール変更をどう捉えている か…調査結果を踏まえて 小川 宏 (福島大学)</p>	<p>第1回 1998. 6. 13 (順天堂大学医学部)</p> <p>「バレーボールのチームづくり男子編その1」</p> <p>1. オーストラリアのバレーボール ～選手強化の国家システム AIS～ 吉田清司 (専修大学)</p> <p>2. 日本一への挑戦 葛宗浩二 (順天堂大学大学院, 元釜利谷高校)</p> <p>3. 中学校トップレベルのチームづくり 寺村重保 (品川区立大崎中学校)</p> <p>第2回 1998. 12. 5 (東北学院大学)</p> <p>「バレーボールのチームづくり女子編」</p> <p>1. 盛岡市立高等学校バレーボール部の強 化を目指して 小林正剛 (盛岡市立高校)</p>	<p>日本体育学会第50回記念大会 学習指導要領改善に関する 調査研究 (2, 3) 学習指導要領小学校中学校 告示 (10, 12) 世界選手権 男子15位 女子 8 位</p>

研究大会	研究集会	備考
3. 25分制併用ルールを考える… '97グランドチャンピオンズカップのデータから 島津大宜 (日本女子大学) 4. 高等学校現場ではルールをどう捉えているか 小林宣彦 (杉並高校) 5. 中学校現場ではルールをどう捉えるか 加賀博紀 (高輪中学)	2. 東北パイオニアの今までの歩みと現在の指導法 田村恵弘 (東北パイオニア) 3. 実業団女子9人制 「トップレベルを目指せる環境づくり」 根本勝司 (福島銀行バレーボール部) 4. 女子バレーボールについての素朴な疑問 松本昌三 (仙台大学)	
第4回 1999. 3. 21 (早稲田大学) シンポジウム 「'98バレーボール世界選手権を語る」 1. 「世界から見た日本のバレーボール」 前田 健 (日本文化出版) 2. 「スポーツマネージメントの立場から見たバレーボール世界選手権」 小島和行 (世界選手権大会事務局) 3. 「選手の立場から見た世界のバレーボール」 加藤陽一 (筑波大学：全日本男子チーム)	第1回 1999. 7. 17 (筑波大学附属高等学校) 「ソフトバレーボールの小学校での実践研究」 1. 教科体育にソフトバレーボールを採用した経過および背景 永島惇正 (東京学芸大学) 2. ソフトバレーボールにおけるゲームの実践指導法 浜崎順子 (京都教育大学附属桃山小学校) 3. ソフトバレーボールのゲームおよびディスカッション 浜崎順子 (京都教育大学附属桃山小学校)	1 セット25点ラリーポイント制導入 学習指導要領高等学校告示 (11. 3) ワールドカップ 男子10位 女子11位 バレーボール学会に名称を変更
研究発表 1. バレーボールの試合時における指導者の非言語行動に関する一考察 三井 勇 (山梨大学大学院) 2. 運動学習理論から見たバレーボール練習法に関する一考察 龍山賢治 (山梨大学大学院) 3. 高等学校バレーボールへのリベロ制導入の有効性について 山田吾朗 (静岡大学大学院) 4. 第13回女子世界選手権大会の決勝トーナメント試合のローテーション・フェイズによるゲーム分析 島津大宜 (日本女子大学) 5. スパイク動作における体幹の捻りと肩関節の水平外転・内転運動 吉田清司 (専修大学)	第2回 1999. 11. 21 (福岡大学) 「ラリーポイント制ではいかに戦うか」 1. 高校女子の指導から 松本 幸 (熊本信愛女子学院高校) 2. 実業団女子の指導から 浜田勝彦 (久光製薬) 3. ラリーポイント制で勝つにはどうしたらよいか？ 濱田幸二 (鹿屋体育大学) 4. ゲームシミュレーションから 吉田清司 (専修大学)	バレーボール学会に名称を変更 バレーボール学会機関誌「バレーボール研究」Vol. 1 発刊 (5.1)
コミュニケーション・アゴラ 1. バレーボールに関する情報収集と情報交換-インターネットの活用- 後藤浩史 (愛知産業大学) 2. 本当にこのままでバレーボールはよいのだろうか 藤生栄一郎 (筑波大学附属高) 3. バレーボールの練習方法の工夫 遠藤俊郎 (山梨大学)	第3回 1999. 12. 11 (早稲田大学) 特別講演 運動学習理論に基づいたコーチング理論の解説 カール・マクガウン (Carl McGown) (ブリガムヤング大学男子バレーボールチーム 監督 (全米ランキング第1位), '99ワールドカップU.S.A 男子チーム団長) オンコートレクチャー バレーボール各技術の様々な練習法の実際 カール・マクガウン	



研究大会	研究集会	備考
<p>第5回 2000. 3. 19 (早稲田大学) シンポジウム 「バレーボール発展のための 企業チームからの提言」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. トップアスリートを育てるためのVリーグ改革～これからの市民社会が求めているトップアスリートとは～ 土肥康宏 (ダイエーオレンジアタッカーズ部長) 2. 新たな企業スポーツ像に向けて 葛和伸元 (NECレッドロケッツ総監督) 3. リベロについて 津雲博子 (NECレッドロケッツ) <p>研究発表</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. バレーボール大会の観戦者行動に関する調査研究 ～ワールドカップ'99 (東京大会) の観戦者調査テーマから～ 清川健一 (埼玉女子短期大学) 2. 中学・高校女子バレーボール選手の運動能力に関する一考案 ～Tarent Diagnose System を用いて～ 岩田菜穂子 (筑波大学体育研究科) 3. Vリーグ選手はどこに着目してブロックするのか 後藤浩史 (愛知産業大学) 4. 国際女子バレーボール試合のラインアップに関する研究 ～'99ワールドカップ大会～ 島津大宜 (日本女子大学) 5. ラリーポイント制では何点差で勝負が決まるか ～世界トップレベルにおける勝利確率の理論値と実際～ 小川 宏 (福島大学) 6. ジャンピングサーブについてのバイオメカニクス的な分析 ～ジャンピングフロッターサーブについて～ 鈴木陽一 (早稲田大学高等学院) <p>コミュニケーション・アゴラ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Volleymechanics Mailing List について 橋本吉登 (大口東総合病院) 2. アジアにおける日本のバレーボール ～シドニー五輪男子アジア地区予選を通して～ 矢島忠明 (早稲田大学) 河野貴美子 (東京都立晴海総合高校) 3. ルールについて 都沢凡夫 (筑波大学) 	<p>第1回 2000. 7. 16 (高槻市立総合市民交流センター) 「さまざまな目が見るバレーボールⅡ ～バレーボールの普及・発展に向けて～」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. トッププレーヤーが見るバレーボール 荻野正二 (サントリー・サンバーズ) 2. 中学校の指導者が見るバレーボール 賤間常文 (箕面市立第六中学校) 3. スポーツドクターが見るバレーボール 布村忠弘 (富山大学教育学部) <p>第2回 2000. 11. 12 (愛知産業大学)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. バレーボールとスポーツビジョン 石垣尚男 (愛知工業大学) 2. オンザコートクリニック スポーツビジョンを取り入れたトレーニング 石垣尚男 (愛知工業大学) 	<p>シドニーオリンピック 男女とも出場ならず</p>

研究大会	研究集会	備考
<p>第6回 2001. 3. 18 (早稲田大学)</p> <p>シンポジウム</p> <p>「21世紀のバレーボールの在り方を考える」</p> <ol style="list-style-type: none"> 森岡裕策 (文部科学省スポーツ・青少年局 競技スポーツ課) 小田勝美 (㈱プレイヤーズスポーツクラブ) 柴田真樹 (朝日新聞東京本社運動部) <p>研究発表</p> <ol style="list-style-type: none"> バレーボール大会の観戦者行動に関する研究(2) ～観戦者の中範囲セグメントを探して～ 清川健一 (筑波大学) バレーボールのレシーブ時における「見るところ」の変容 後藤浩史 (愛知産業大学) バレーボールにおけるサーブの準備行動に関する研究 田中博史 (順天堂大学) 世界のバレーボールの練習法 加戸隆司 (山梨大学) 国際女子バレーボール試合のラインアップ分析に関する研究 ～'00シドニーオリンピック最終予選、 日本対イタリアの分析～ 鳥津大宜 (日本女子大学) バレーボールのスバイクジャンプに おける筋・腱複合体動員様相 瀧間久俊 (早稲田大学) Toe-up Volleyball Shoes がジャンプパフォーマンスに及ぼす効果 黒川貞生 (東京大学大学院) <p>コミュニケーション・アゴラ</p> <ol style="list-style-type: none"> バレーボールの戦略 ～夙川学院短期大学公開セミナーより～ 藤島みち (夙川学院短期大学) ケガは「ストップ」の時に起きる ～Volleymechanics からみたケガの成因 について～ 橋本吉登 (藤沢湘南台病院 整形外科) ジャンプ運動における筋・腱複合体 の動態 黒川貞生 (東京大学大学院) 	<p>第1回 2001. 7. 7 (早稲田大学)</p> <p>シンポジウム</p> <p>「これからのバレーボールを考える ～現場からの提言～」</p> <ol style="list-style-type: none"> 私の実践報告 ～勝つためのチームづくり 理論と実践～ 壬生義文 (岡谷工業高校バレー部監督) 大型女子選手の育成方法について 廣 紀江 (学習院大学) <p>第2回 2001. 10. 21 (香川大学)</p> <p>シンポジウム</p> <p>「ジュニア期の選手を どう伸ばしていくか？」</p> <ol style="list-style-type: none"> ジュニア期の選手をどう伸ばしていくか? 池田長廣 (全日本ジュニア男子バレーボール チーム監督) 香川県における実践 ～中学校男子の指導育成における創意 と工夫～ 亀山正昭 (前・仲南町立仲南中学校) 香川県における実践 ～中学校女子の指導育成における創意 と工夫～ 長曾絹代 (牟礼町立牟礼中学校) 	





研究大会	研究集会	備考
<p>第7回 2002. 3. 17 (大阪体育大学) シンポジウム 「バレーボールは変わるか」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 日本サッカーの一貫指導システム 山口隆文((財)日本サッカー協会) 2. 一貫指導システムの構築及び その必要性について 西田 守((財)日本バレーボール協会) 3. 経営的視点からみたバレーボールの 改革のためのヒント 本間浩輔(紳スポーツナビゲーション) <p>研究発表</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. バレーボール大会の観戦者行動に関する研究 (3) ～第7回Vリーグ男子決勝リーグ観戦者データから～ 清川健一(筑波大学) 2. バレーボールにおける地域密着化及びクラブ化に関する研究 ～現状と今後の研究課題～ 松田裕雄(筑波大学大学院) 3. サーブボールの軌跡、速度に関する考察 伊藤雅充(日本体育大学) <p>コミュニケーション・アゴラ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. インターネットコミュニケーションとネットワークづくりの重要性 後藤浩史(愛知産業大学) 2. バレーボールの学習指導について 宮内一三(京都橘女子大学) 3. 有酸素的トレーニングはバレーボール選手に必要なか?～どの程度の持久力がバレーボール選手に要求されるか?～ 黒川貞生(女子美術大学) 	<p>第1回 2002. 7. 7 (明治学院大学) 「Spike it! ～スパイク理論とそのコーチングを再考する～」 オンコートレクチャー</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 初心者および中学生の指導におけるスパイク理論とそのコーチング 半沢一郎(第二南砂中学校:東京都中体連強化委員長) 2. トッププレーヤーの指導におけるスパイク理論とそのコーチング 岩島彰博(富士フィルム:元全日本ジュニア男子監督) 3. スパイクと肩の障害 橋本吉登(藤沢湘南台病院) <p>第2回 2002. 11. 3 (富山大学教育学部) 「Spike it! ～スパイク理論の秘密に迫る～」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. スパイク動作の理論とコーチング 浜田勝彦(元神奈川中央交通・久光製薬監督) 2. スパイクスイングのタイプとジャンプ動作のバイオメカニクス 堀田朋基(富山大学教育学部) 3. スパイク動作における骨格の動き 布村忠弘(富山大学教育学部) <p>アフターヌーンセッション 画像による事例検討およびディスカッション 司会 鈴木 漢(金沢大学)</p>	<p>世界選手権 男子8位 女子10位</p> <p>新学習指導要領 小学校, 中学校実施 (4, 1)</p>
<p>第8回 2003. 3. 23 (明治学院大学) シンポジウム 「日本バレーボール再建へのシナリオ」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 日本と世界のバレーボールおよびコーチングの差違について ゴードン メイフォース (Gordon Mayforth)(堺ブレイザーズ監督) 2. 日本バレーボール再建へのマスメディアの貢献および提案等について 川口哲生 (株)フジテレビジョン スポーツ局 スポーツ部 製作担当部長) 	<p>第1回 2003. 7. 20(北海道浅井学園大学) 研究発表</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ジュニアキャンプの開催経緯について 後藤 俊 (北海道浅井学園大学名誉教授・北海道協会参与) 2. ジュニアキャンプ(中学生)にみる一貫指導体制 新田一夫 (旭川市立愛宕東小学校・前北海道協会指導普及委員長) 	<p>会長, 副会長, 理事等選挙による選出</p> <p>ワールドカップ 男子9位 女子4位</p> <p>新学習指導要領高等学校実施(4, 1)</p>

研究大会	研究集会	備考
<p>3. バレーボールの強化・普及に関わる組織・システム等について 砂田孝士 (財)日本バレーボール協会専務理事)</p> <p>一般発表 コミュニケーション・アゴラ</p> <p>1. 精神障害者バレーボール競技の今後の普及と方向性について 田所淳子 (高知県立精神保健福祉センター) 一柳信幸 (高知市役所)</p> <p>2. バレーボールの競技者育成システムについて 伊藤雅充 (日本体育大学)</p> <p>3. バレーボール文献データ・ベースについて 黒川貞生 (女子美術大学)</p> <p>研究発表</p> <p>1. バレーボール選手のジャンパー膝に関する実態調査 河合優実 (筑波大学大学院生)</p> <p>2. 大学トップチームのトスの滞空時間 伊藤雅充 (日本体育大学)</p> <p>3. 大学女子バレーボール競技における高強度運動の出現頻度 黒川貞生 (女子美術大学)</p> <p>4. 大学男子バレーボール競技における高強度運動の出現頻度 柴 義章 (早稲田大学)</p> <p>5. ブロック動作時間計測システムの開発 山田雄太 (日本体育大学)</p> <p>6. ボールの回転方向の検出における反応時間 矢野 博 (神奈川大学)</p> <p>7. 床上および砂上跳躍動作のキネマティクスの分析 根本 研 (日本体育大学)</p> <p>8. サーブレシーブのビジュアルトレーニング効果 石垣尚男 (愛知工業大学)</p> <p>9. 企業及び地域クラブのマネジメントに関する研究 ～経営タイプとビジョンに着目して～ 松田裕雄 (筑波大学体育科学系)</p> <p>10. メタ分析を用いたバレーボール優秀選手の心理的特徴～他種目競技者との比較～ 加戸隆司 (山梨大学)</p>	<p>3. サマーキャンプ (小学生) にみる一貫指導体制 本間章彦 (北広島市立大曲東小学校・北海道協会指導普及小学部長)</p> <p>4. 総合型クラブにみる一貫指導体制 永谷 稔 (北海道浅井学園大学・北海道協会指導者普及副委員長)</p> <p>オンコートレクチャー ジュニアキャンプ (中学生) における実技指導の実際 ～レシーブを中心に～ 山本忠文 (江別市立中央中学校・北海道協会指導者普及委員)</p>  	

研究大会	研究集会	備考
<p>第9回 2004. 3. 27～28 (明治学院大学)</p> <p>会長講演 「バレーボール学会の足跡と展望」 枋堀申二 (バレーボール学会会長・東京女子体育大学)</p> <p>シンポジウムⅠ 「バレーボールの授業展開を再考する！」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 中学校体育教諭の立場から 保坂広美 (足立第四中学校) 2. 高等学校におけるバレーボール授業を再考する 小林宣彦 (都立園芸高等学校) 3. 学習指導要領の改訂を踏まえたバレーボール授業のあり方 柏森康雄 (大阪体育大学) <p>シンポジウムⅡ 「コーチに要求される資質を再考する！」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 中学校・高等学校バレーボール部チームのコーチの立場から 清水直樹 (文京学院大学女子高等学校・中学校バレーボール部総監督) 2. 実業団バレーボールチームのコーチの立場から 松永 敏 (上尾中央総合病院バレーボール部監督) 3. トップレベル・バレーボールチームのコーチの立場から 藤田幸光 (MSA プランニング) <p>オンコートレクチャー 「セッターの系統的コーチング～ビキナーからトッププレーヤーにわたる育成方法～」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ヨーコ・セッターランド (コナミスポーツ(株)：元アメリカ女子バレーボールチームセッター) 2. 藤田幸光 (MSA プランニング：前全日本男子バレーボールチーム コーチ) <p>ワークショップ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 練習前後のボディー・メンテナンス ～練習前のテーピングからコア・リセットそしてコア・ストレッチまで～ 岩崎由純 (NEC 女子バレーボール部アスレティックトレーナー) 2. フリーディスカッション (オンコート・レクチャー&ワークショップを通じて) 橋本吉登 (横浜スポーツ医科学センター) 	<p>第1回 2004. 7. 3 (専修大学)</p> <p>シンポジウム 「バレーボールのチームづくり」 飽くなき覇権への挑戦 ～サンバース5連覇の軌跡と今後の展開～ 鳥羽賢二 (サントリー・サンバース GM)</p> <p>オンコートレクチャー ミドルプレーヤーのためのオンコートレクチャー 佐々木太一 (サントリー・サンバースセンタープレーヤー)</p>	<p>アテネオリンピック 女子5位 男子出場ならず</p> <p>企画、編集、総務委員会に加え 渉外委員会が加わる</p>

研究大会	研究集会	備考
<p>一般発表</p> <ol style="list-style-type: none"> 千葉県家庭婦人バレーボール参加者の実態調査 徳永文利 (国際武道大学) '03男女ワールドカップ大会における各チームの各ローテーションフェイズの勝率に基づくスターティング・ラインアップに関する研究 島津大宣 (日本女子大学) World Cup Volleyball 2003におけるドーピングコントロール活動 青木義広 (防衛医科大学校) バレーボールにおけるサーブレシーブ時のスタンスに関する研究 山本 聡 (富山大学大学院生) <p>第10回 2005. 3. 26~27 (東京女子体育大学)</p> <p>10周年記念講演 「バレーボールと社会の姿」 渥美東洋 (中央大学教授・中央大学バレーボール部長)</p> <p>シンポジウム 「夢をかなえるバレーボール」</p> <ol style="list-style-type: none"> 勝つためのゲームプランニング ～アメリカ女子チーム～ 吉田敏明 (USA 女子ナショナルチーム監督) 勝つためのゲームプランニング ～大学男子～ 都澤凡夫 (筑波大学・バレーボール部監督) <p>オンコートレクチャー 「すべては攻撃から」 都澤凡夫 (筑波大学・バレーボール部監督)</p> <p>研究発表 第1部</p> <ol style="list-style-type: none"> Vリーグから広域ナショナルリーグへの構想と可能性 ～東アジアにおけるグローバル化と地域統合の観点から～ 松田裕雄 (筑波大学体育科学系) 正統的周辺参加論を視野に入れた部活動における学習論の構築 ～T大学男子バレーボール部の場合～ 小野智史 (筑波大学大学院) 	<p>研究集会</p>  	<p>備考</p> <p>バレーボール学会 10周年記念大会</p> <p>記念出版「Thinking Volleyball 100Q 入魂」発刊 (3.26)</p> <p>記念式典, 表彰, パーティー開催 (3.26)</p>

研究大会	研究集会	備考
<p>3. バレーボールのゲーム分析に関する研究 ～コンピュータ・シミュレーションを用いて～ 柳 宏 (都留文科大学)</p> <p>4. バレーボールのチーム力評価に関する研究 米沢利広 (福岡大学)</p> <p>5. バレーボールにおけるブロックの効果に関する研究 ～相手の攻撃に対応したブロック戦術について～ 松田敏男 (日本大学藤沢高校)</p> <p>6. バレーボール競技における得点方式変更の影響からみた競技水準について 篠村朋樹 (木更津工業高等専門学校)</p> <p>7. ラリーポイント制におけるゲームの勝利確率について 小川 宏 (福島大学)</p> <p>8. 2003年度中学生・高校生バレーボール選抜優秀選手の心理的特徴に関する一考察 遠藤俊郎 (山梨大学)</p> <p>9. バレーボール選手の集中力スタイルに関する研究 浅川大輔 (順天堂大学)</p> <p>10. 競技経験年数に着目した運動選手のコーピングに関する研究 ～バレーボールを中心的視座に捉えて～ 山田泰行 (順天堂大学大学院)</p> <p>11. スポーツクリニックを受診したバレーボール障害選手の検討 橋本吉登 (横浜市スポーツ医科学センター 整形診療科)</p> <p>12. スパイクジャンプにおける下肢3関節の発揮トルク 黒川貞生 (女子美術大学)</p>	    	
<p>第2部</p> <p>13. バレーボールにおけるブロック面の研究について 薦宗浩二 (順天堂大学大学院)</p> <p>14. バレーボールのスパイク指導に関する研究 ～運動発達の特性を活かした合理的な指導法の検討～ 鈴木真理子 (中央大学附属高等学校)</p>		

研究大会	研究集会	備考
<p>15. 中学校保健体育における「バレーボール」教材の研究 ～附属中学校6人制ゲームの様相～ 則武宏典 (茨城大学教育学部)</p>		
<p>16. ゲーム学習を中心としたバレーボールの学習指導 ～生涯スポーツを睨んで～ 松井泰二 (文教大学)</p>		
<p>17. キャリア移行におけるVリーガーの心理的プロセスに関する実証的研究 ～役割卒業理論の枠組みを用いたキャリア観からのアプローチ～ 水野基樹 (順天堂大学)</p>		
<p>18. 監督と選手はお互いをどこまで“見抜いている”のか? ～スポーツチーム内での対人認知に関するTriadデータによる予備的検討～ 今丸好一郎 (東京女子体育大学)</p>		
<p>19. バレーボールにおけるメンタルサポートに関する事例研究 ～ある高校女子チームへの短期間サポート～ 氏原 隆 (中京女子大学)</p>		
<p>20. 得点法によるバレーボールのゲーム分析に関する研究 島津大宣 (日本女子大学)</p>		
<p>21. バレーボール競技における諸外国チームとの対戦に関する実践研究報告 中西康己 (筑波大学)</p>		
<p>22. 大学女子バレーボールリーグのレベル差について 箕輪憲吾 (県立長崎シーボルト大学)</p>		
<p>23. サーブパフォーマンス様式に関する分析 高橋宏文 (東京学芸大学)</p>		
<p>24. バレーボールのフロントスパイクとバックスパイクの比較 鈴木陽一 (早稲田大学高等学院)</p>		

7. J.S.V.R.³ニュースレターの発刊

会員各位との情報伝達としてニュースレターを1996年10月 No.1 を発刊した。会長挨拶文を示しその意図を述べることとする。

「挨拶文」

「随より始めよ」の意味する如く、私共のバレーボール研究会は、日々バレーボールに関わっていらっしゃる現場の指導者から、トップレベルを目指すチームのコーチの方々、バレーボールをより普及発展させていくことに心を裂いている研究者等々、多くの人々の総力を結集させ活動をスタートいたしました。このことによりスポーツ文化としてのバレーボールをより素晴らしいものに仕上げ、大勢の方々に愛されるようにしていきたいと考えています。更に次代を担う若い人達にこの素晴らしさを伝えていかなくてはならないと考えています。

バレーボールを取りまく幅広い課題を提案し、その各々にご関心を抱く方々と学び合い、問い合う関係を作り上げたいと願っています。

国内での高まりとまとまりが出来たなら、アジアの研究者達にも声をかけていきます。北京でも西安でも台湾でも私共の研究会に関心を示してくれる人達に会いました。いずれは世界のバレーボール愛好者達にも仲間に入っていたきたいと感じています。

機会をお作り下さい、積極的にこの会を御支援下さい。

2) ニュースレター第9号

2002年9月のニュースレター No.9 に巻頭言を記した。昨今のバレーボールに関する思いの一端を示したものである。

「巻頭言」

今年の6月は世界中がワールドカップ・サッカー一色になり燃えた。日本でもプロ野球が試合スケジュールを変えて臨役となった。

オリンピックは様々な種目が競われる。記録の上位の者、過去の実績のあるチーム、金メダル取得大国が勝利するという図式は、競技前からの予想通りになる。必然性の高いものといえる。一方、サッカー1種目で1ヶ月間も自国チームのみにこだわらず、心を引きつけてくれたワールドカップは何であったのか。

90分間の攻防のなか、僅かなチャンス、一瞬のミスが勝敗を決定づけてしまう。選手達は必ずチャンスが訪れると信じ、ボールを追い続ける。相手とぶつかり合い、押さえ合い、引っ張り合い、それが運悪く反則となったりならなかったり、意外性の連続に緊張が持続されるのである。

サッカーのゲームは中断がなく、ボールを手で処理して

はいけない、ボールの前でプレーしてはいけないといった単純なものである。古くは1点先取のルールがあった。22人のプレーヤーが90分戦って1・2点しか取ることができないという、気を揉みながら楽しみを味わい続けられる面白さがある。

バレーボールに比べるとサッカーでは、ゲームが開始されるとテクニカルタイムアウトや休息のためのタイムアウトもなく、監督やコーチがゲーム中に指示することもなく、ただ選手同士が組織的ネットワークのみにたより進行していくのである。

バレーボールでは相手チームより多く得点を取って勝つことであり、監督、コーチなどの意志の伝達が頻繁にあり、これを有効に生かしてゲームを展開していく。メンバー交代、タイムアウト、作戦伝達、個人的戦術の修正や徹底等の組織原理が中核となっている。

イギリスのフットボールの歴史は古く、ヨーロッパ各国にも文化としてこの競技は定着してきた。一方、バレーボールはアメリカのYMCAでの冬の室内競技としてバスケットボールと共に考案されたものでありその歴史も浅いといえる。FIFAが1909年、FIVBが第二次世界大戦後の1947年、いずれもフランスで設立されているが、国際化した歴史にも大きな差があるといえる。

ヨーロッパの伝統的なスポーツ観に支えられたサッカーに対し、野球、バスケット、バレーボールはアメリカの合理主義的な考えに支えられ、文化としても差があるといえる。

私たちのバレーボールは、人々のニーズ、時代の要請に応じてその様相は変化してきた。それぞれの発生的特性を理解し、それなりの有り様を確立させていかなくてはなるまい。

7月22日、立川市で聾学校のバレーボール大会があった。審判の手伝いからもどった学生達から「ハンディを全く感じさせず、ひたむきにボールを追い続けていた彼等のプレーに感動した」とその様子を語ってくれた。

6人制、9人制バレー、盲人バレー、シットイングバレー、車椅子バレー、ビーチバレー、ソフトバレー等、私たちのまわりにはバレーボールに興じている多くの人たちがいるのである。

いつでも、いつまでも、だれとでも、どこでも気軽にいくことのできる競技として、仲間と協力しつつ生かし生かされながら楽しめるこのバレーボールを、いつの日にかサッカーと並ぶ世界のスポーツにしていきたいものである。

ニュースレターは1996年研究会発会時 No.1 から2004年9月 No.11 の通算11号が刊行された。

³J.S.V.R. The Japanese Society for Volleyball Research. バレーボール学会の国際化を目指しての英文名として定めた。

8. 機関誌「バレーボール研究」発刊

バレーボール学会員の研究活動、バレーボールの指導実績の報告、授業研究等、多くの実績が積み重ねられてきた。ここに機関誌「バレーボール研究」が1999年に発刊された。

「バレーボール研究発刊にあたって」

バレーボールが誕生して100年の歳月が経ち、この間、誰でも、いつでも、どこでも親しめるスポーツとしてのバレーボールも、競技性の追求と国際化の中で、多くの人々に知られ行われるスポーツとして発展してきました。

私たちは、次の100年を目指し、バレーボールのほんとうの楽しさ、素晴らしさとは何か、どのように考え実践していくか、経験の上に更に科学の目を加えて、より多くの人々が自らの人生を豊にしていくことのできるバレーボールを目標に、1995年5月バレーボール研究会を発足させました。今日まで数多くの内外の専門家からの特別講演、研究発表、シンポジウム、アゴラ等を通して、より深く、より広く、より多くの会員と検討を加え、研究を推進して来たのです。

1999年3月のバレーボール研究会総会に於いて更に一歩前進する意味で「バレーボール学会」と名称を改め、これに加えて学会機関誌創刊号の発刊が実現することになったのです。

このことは、会員一同のたっでの願いでもあり、日本におけるバレーボール研究の最も権威があり格調の高い機関誌になってほしいと意欲をもっている所です。

多くの方々が広い視野から様々な角度、立場から、各人の直面する得意とする分野からの研究成果をお寄せ下さり、本学会の研究業績の発表の場としてご活用願えれば幸甚と存じます。皆々様からのお力添えと厳しいご批判をお待ちいたします。
(平成11年4月8日)

9. 会則の全面的改正

2003年度バレーボール学会は、会員各位からの自発的かつ積極的建設的意見を汲み上げて会を運営するという主旨で会則の改正に取り組んだ。

会長、副会長、監事については理事による互選によって選出すること。

理事のうち若干名は会長が指名すること。このことは学会の運営上の継続性地域ごとの活動の動向、専門分野、活動基盤、女性の参加する場の拡大等を考慮し推薦し選出することが加えられたのである。

他の学術団体がそうであるように会員の総意を大切にしつつバレーボール学会が発展することが期待されるのである。

バレーボール学会 会則

1996年5月25日制定

1998年3月28日改正

1999年3月21日改正

2003年3月23日改正

第1章 総則

第1条 本会は、バレーボール学会（The Japanese Society of Volleyball Research）と称する。

第2条 本会は、バレーボールに関する科学研究とその発展に寄与するとともに、会員相互の情報交換、研究協力を促進することによって文化としてのバレーボールの発展をはかり、これによってバレーボールの実践に資することを目的とする。

第2章 事業

第3条 本会は、第2条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 研究大会の開催
2. 研究集会・講演会等の開催
3. 機関誌「バレーボール研究」、会報、会員名簿の刊行、ならびにその他の出版
4. 研究の学際的、国際的交流
5. その他本会の目的に資する事業

第3章 会員

第4条 会員の種別は次の通りとする。

1. 正会員：本会の趣旨に賛同し、本会会費を毎年度納入している者をいう。
2. 特別会員：正会員以外の団体及び個人で、本会の趣旨に賛同する者をいう。

第5条 本会に入会を希望する者は、会費を添えて事務局に申し込むものとする。

第6条 会員は、本会の機関誌その他研究情報に関する刊行物の配布を受けることができる。

第7条 正会員で2ヵ年会費を納入しない者は退会したものとみなす。

第4章 役員

第8条 本会に次の役員を置く。

1. 会長（1名）
2. 副会長（2名）
3. 理事（25名）
4. 監事（2名）

第9条 本会に顧問を置くことができる。顧問は、理事会の推薦により、総会において決定する。

- 第10条 役員は次の各項により選任される。
1. 会長・副会長及び監事は、理事会の議を経て、総会において決定する。
 2. 理事の選出は、選挙管理委員会が行い、正会員による5名連記の投票により選出し、総会において決定する。
 3. 理事のうち若干名は会長が委嘱することができる。
- 第11条 役員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし任期途中であっても、事故等により活動が不可能となった場合、あるいは本会の役員としてふさわしくない行為等があった場合は、理事会の議を経て、これを解任することができる。
- 第12条 本会の役員は、次の責務を負う。
1. 会長は、本会を代表し、会務を総括する。
 2. 副会長は、会長を補佐し、会長事故ある時は、これを代行する。
 3. 会長・副会長および理事は理事会を構成し、理事長を選出する。
 4. 理事長は会長を補佐し、総会及び理事会の議決に基づき、会務を執行する。
 5. 理事会は、必要に応じて専門委員会を設け、委員を委嘱することができる。
 6. 監事は、本会の業務及び会計を監査する。

第5章 会議

- 第13条 本会の会議は、総会及び理事会から構成される。
- 第14条 総会は、年1回会長がこれを招集し、次の事項を審議する。
1. 役員の選出
 2. 事業報告及び収支報告
 3. 事業計画及び収支予算
 4. 会則、会費の改正
 5. その他重要事項

第6章 会計

- 第15条 本会の経費は、次の収入によって支出する。
1. 正会員の会費（会費の額は理事会の議を経て総会で決定される）
 2. その他
- 第16条 本会の会計年度は、毎年4月1日より翌年3月末日までとする。

第7章 事務局

- 第17条 本会の事務局は、原則として理事長が所属する機関に置く。

第8章 付則

本会則は2003年3月23日より施行する。

10. 研究発表等件数一覧

1996年から2005年の10年間にわたって研究大会（毎年総会時に開催）、研究集会（年1回以上日本各地で開催）、機関誌バレーボール研究等に投稿された研究成果は、バレーボール学会の資産として多くのバレーボール関係者に浸透され活用されている。

表2は2005年3月現在の発表件数の一覧を示したものである。

表2 研究発表等件数一覧

		<研究大会>			<研究集会>		<バレーボール研究>			
		講演 シンポジウム	研究発表 シンポジウム コトバ	コミュニケー ションアグラ	研究発表 シンポジウム オンコート レクチャー等	総説 特別寄稿	原 著	研究資料	内外の 動向	
1	1996	3	2	-	6	(1)				
2	1997	4	4		8	(2)				
3	1998	6	5		7	(2)				
4	1999	3	5	3	9	(3)	1	4	4	2
5	2000	3	6	3	5	(2)	1	2	1	2
6	2001	3	7	3	5	(2)	2	3	2	2
7	2002	3	3	3	7	(2)	1	2	2	1
8	2003	3	10	3	5	(1)	1	2	1	0
9	2004	7	8		2	(1)	1	2	5	5
10	2005	3	24				0	2	1+1	9
	計	38	74	15	54	(16)	7	17	1+16	21

() は研究集会回数

11. ま と め

バレーボール学会10周年目を迎えるにあたり、発会に至る状況と本会の趣旨、目的等について振り返り、初心にかえり改めて次なる10年に向け更なる充実と発展を期していきたいと願うものである。このことは新たに参加した会員、参加したいと思っている方々にも学会の思いを伝え残したいと考えるのである。

研究会から学術団体として相応しい組織を運営、活動内容を兼ね備えた学会へと改名したのである。

会員数も1996年研究会発足時は171名であったが現在のバレーボール学会員数は406名と増加し、様々な活動分野から又小学生からオリンピック選手を対象に指導にあたっている人達、スポーツ産業に係わる方々、スポーツクラブ、行政関係等幅広い層から学会活動を支えているのである。

毎年恒例となった研究大会・総会、研究集会（17年度からバレーボールミーティングとする）、学会機関誌「バレーボール研究」には多くの研究成果と実践活動報告や諸外国のバレーボール情報と著作物等を紹介してきた。ニューズレターの定期刊行、10周年記念出版として「Thinking Volleyball 100Q 入魂」を刊行した。

何としてもこれらを有効な価値のある資源として多くの現場でバレーボールの指導にあたっている方々や、学校、クラブ、チーム関係者に効率よく伝達され活用してほしいと願うものである。

バレーボールをスポーツ科学の多くのサポートを取り入れて新たなるものとして再構築させていきたい。またバレーボールを貴重なスポーツ文化として人々の豊かな生活や人生にとって有意義で価値のあるものとして次代に生きる人々に伝承していきたいと考えている。

バレーボール学会が、国内外の関係者から高く評価され、会員各位が自慢することができ、誇りあるものにしていく努力と協力を更にはらっていただくことを期待するものである。

10年間の活動を通してこれらの活動が学会として輝しい実績を築き上げていくことができた点、会費はもとより多くの関係者各位に感謝申し上げる次第です。

次なる10年は更なる意味ある学会の成果が日本国内はもとより世界に向けて情報を発信し、バレーボール界に影響を及ぼすべく価値ある一石を投じていきたいものである。

(17. 1. 29 投稿)



諸外国のバレーボール事情と日本の普及発展の方策を探る

1. アメリカ合衆国のバレーボール事情

川北 元 (ロックハイブun大学)

吉田 敏明 (前アメリカ女子バレーボールチーム監督)

1. 基本的な事柄

1) 協会組織: USAVB (USA バレーボール協会)

所在地: 715 South Circle Drive

Colorado Springs, CO 80910

2) 主な指導者組織: AVCA (American Volleyball Coaches Association=アメリカバレーボール指導者協会)

指導者資格認定のシステムにおいて、USAV CAP (Coaches Accreditation Program=コーチ公認プログラム) という USAVB 主催のコーチ育成のためのプログラムが Level 1 から 3 まであり、それぞれのレベルに合わせた指導者講習が定期的に行われている。この CAP はアメリカの指導者の指導力向上のために行われているもので、特定のプログラムにより行われている。しかし、その資格を取得することによって高いレベルのチームで指導できるなどといった特権は無い。

また、年に一度 AVCA 主催による Coaches Convention (指導者集会) が行われ、バレーボールの指導におけるさまざまなテーマをもとに、約 1 週間にわたりコーチングクリニックが行われる。この Coaches Convention は、全米の指導者に呼びかけられ、コーチングクリニックだけでなく指導者の就職斡旋、バレーボールに関連する企業やスポーツメーカーの宣伝など、バレーボールに関するあらゆる分野での向上を図っている。

3) バレーボール人口

人口については USAVB, AVCA などに問い合わせたものの、残念ながら正確な数字を得ることができなかった。しかし、USAVB 主催の大会に登録した選手の数には 164,836 名であり、そのうち 17,824 名が成人男性で、22,046 名が成人女性、さらに 7,909 人がジュニアの男子、117,057 人がジュニアの女子である。また、学校の部活動よりも地域のクラブチームでの活動が盛んなアメリカ合衆国 (以下、アメリカと記す。) では、ジュニアレベル (14~18 歳) のバレーボール選手のうち、男子が 7,909 名、女子が 117,057 名クラブに所属していることがわかった。

AVCA によると、確かではないが国内すべてのレベルを含めると、おそらく指導者は 50,000 名、さらに、選手は 500,000 名にまで上ることが推測できるという。

2. 普及面 (育成政策を含む)

1) 小・中・高 (学齢期) における VB 活動について

基本的にアメリカでは 7th grade (12 歳または 13 歳ごろ) から学校の部活動と地域のクラブチームでバレーボールがおこなわれており、小学生の年齢でバレーボールを始めているところは少ない。さらに、季節によって行われるスポーツが決まっており、バレーボールは 8 月から 12 月までの約 4 ヶ月間で行われる。

① 練習時間について

特に高校の部活動としては、チームによって異なるが週に 3 から 4 回 2 時間程度が平均の練習時間といえる。上述したように、バレーボールは夏季から秋季にかけての 4 ヶ月と短い期間で活動が行われるため、学校の部活動のレベルでの強化は困難な状況にある。

クラブの練習は、週 3 回、一回 2 時間が通常であり、日曜日は試合で無い限り休みである。シーズンは、学校での活動が終わってからの 11 月中旬から 6 月中旬まで行われるが、クラブチームにおいては様ざま、強化しているところでは専用コートを抱えバレーボールのシーズンに向け年間を通して指導しているチームもある。

② 指導者について

バレーボールの指導者のレベルは、特に中学・高校において、日本の指導者と比べると技術や戦術、チームづくりを含め経験の少なさを感じる。というのもアメリカではどのような経歴を持っている人でも指導者として働くことができるため、バレーボールの経験が全く無い指導者が少なくない。このような状況は特に男性の指導者に多くみられ、女性の指導者の方が経験や知識が豊富なことが多い。その理由の一つとして、アメリカではアメリカンフットボールやバスケットボール、ベースボールが男子のスポーツとして根強い人気を誇っているため、男子がバレーボールを行うことができる環境が比較的少ないことが上げられる。そのため、男性が本格的に選手としてバレーボールに取り組み、その後指導者として活躍しているといった例の割合が低いのが現状といえる。

2) 大学における VB 活動について

大学においては NCAA (National Collegiate Athletic Association) という組織 (他にも複数の組織がある) が主体となり、大学の運動部におけるルール (NCAA Rules) を定めており、シーズン中、またはオフシーズンにおける練習時間、試合形式、選手勧誘の方法など様ざまな項目に

において細かく規定されている。このルールは大学のスポーツ競技団体における法律のようなものであり、このルールを守らない場合はその大学運動部の活動は停止されるほど明確に定められているものである。

①練習時間について

NCAA ルールの規定により、どの競技団体においても1週間に20時間を越える練習をしてはいけない。さらに、必ず週に1日の休日を入れなければならないというルールがあるため、どの大学もそれ以上の時間を練習に割くことはできない。

オフシーズンにおいては、週に8時間以内でのウェイトトレーニング、またはコンディショニングトレーニングが許されており、それ以外は、チームとしての活動は禁止されている。しかし、スプリングシーズン(3月から4月にかけての45日間)といわれる特別活動期間が設けられており、その期間に向け指導者1人に対して選手4人までと定められた個別練習として、週2時間以内で指導者とボールを使っている練習が許可されている。

②試合形式について

NCAA では国際ルールを採用しておらず、通常とは異なる独自のルールをもって大会・試合を行っている。主な違いをあげると、ボールはカラーボールではなく未だに白球を使っている。また、1セット30点制であり、メンバーチェンジは12回まで行うことができる。女子に限り、リベロによるサーブが許可されている等である。

③指導者について

アメリカの選手のバレーボールにおける技術レベル、また、チームによるコンビネーションプレーや戦術、戦略的なプレーにおいて、日本選手と比べると精密さに欠ける。その理由として挙げられるのが、細かい基本技術に対する指導力の欠如、さらに指導者の戦術、戦略に対する知識の薄さではないだろうか。というのも、アメリカの短い4ヶ月のシーズンとNCAA ルールによる拘束により、選手の技術レベルの改良を行うことが時間的に困難だからである。したがって、指導者たちは、身体的、または技術的にレベルの高い選手を勧誘し獲得することによってチームを強化するという、短期的な方法をとらざるを得ない。しかしその一方で、高さやパワーといった選手の身体能力を生かしたシンプルな戦術が、選手に世界で戦っても力負けしない豪快さを植えつけているともいえる。こういった理由により、「育成」「強化」といった面での本質的な意味合いに日本とアメリカにおいての相違を窺うことができるのではないだろうか。

3) 一貫指導システムについて

アメリカではクラブチームでの活動が学校単位での指導よりも盛んなため、チームによっては長い時間(中・高の6年間)をかけた継続的な指導をすることもできなくはない。しかし、実際はシーズン制により選手がバスケットや他のスポーツを春や冬の間に行っていることも多く、一つ

のコンセプトを元に、長期間の継続した指導がシステムとして形づけられているチームは非常に少ないといえる。こういった現状を踏まえ、USAVBにおいては、特に2001年から就任された吉田敏明監督のもと The High Performance Program (ハイ パフォーマンス) というユースやジュニアの年代を対象とした高い能力の選手の発掘、育成、強化を定期的に行い、将来のUSA 代表選手を積極的に“つくり”出そうとしている。また、一貫した指導法を、ユースやジュニアのレベルだけでなく、大学レベルからUSA-A2(大学学生選抜)、USA 代表に至るまでの各カテゴリーの指導者に、コーチングクリニックやAVCA(American Volleyball Coaches Association)などを通して伝達されて来ている。

4) その他

①生涯スポーツとしてのVB活動について

バレーボールは1895年にマサチューセッツ州、ホーリオークのYMCA(Young Men Christian Association)でディレクターをつとめるWilliam G. Morgan(ウィリアム・G・モーガン)によって生涯スポーツとして考案されたのがきっかけである。事実、アメリカのいたるところにYMCAが設立されており、庶民の健康増進のため、または交流の場として、現在も一般の人々のためのバレーボール大会が女子リーグ、男子リーグ、男女混合リーグなどに分かれて行われている。地域にもよるが、このような状況はバレーボール未経験者にも気軽に参加でき大変親しまれている。

夏の間には国内のいたる所で、一般参加のビーチバレーボール大会や芝の上での4人制グラスバレーボール大会が貸金制で行われている。

3. 強化面

1) 国内トップリーグについて

現在アメリカ合衆国には、プロリーグまたは日本における企業チームがない。そのため、トップリーグとしてあげるならばNCAA-ディビジョン1(以下DI)リーグであろう。NCAAではDIからDIIIまでの3段階のレベルでチームが分けられている。この区分は、日本のようにチームの強さによって1部リーグから下部リーグといったように分かれているわけではなく、その大学チームの財政規模の違いによって分けられている。つまり、強化費用の多いチームはDIに所属することができ、その規模の大きさによってDIIまたはDIIIのレベルに所属し競技することになる(資料1参照)。

期間・試合形式においては上記にあげた通りであるが、外国人の出場制限の点では制限が無く、過去にプロとして試合に出場していなければ、どの国のどのレベル(例えばナショナルチームで活躍していた選手)であっても出場可能である。したがって、チームによってはスターティングメンバーの多くが外国籍の選手であることも少なくない。

2) ナショナルチームについて

①活動拠点について

ナショナルチームは主にコロラド州コロラドスプリングスにある Olympic Training Center (以下 OTC と記す。) で活動している。OTC には水泳、体操、柔道、サイクリング、射撃などさまざまな競技のための施設だけでなく、選手が生活するためのドメトリーや、リラックスしながら栄養を考えた食生活ができるカフェテリア、さらに、科学的なトレーニングを行ううえでの基礎となるスポーツ科学施設と研究スタッフ、選手の怪我のケアやリハビリテーションを行うトレーナー施設にトップクラスのトレーナーたちが配置、配属されている。

②スタッフの選出方法について

USA 代表のスタッフは、協会により厳密な審査と面接、監督としての過去の経験などを踏まえて監督の選出を行う。2000年の公募の例を挙げると、近年における世界を見据えたコーチング哲学、就任以後のオリンピックに向けた4年間の強化プラン、技術やシステムに対する考え方のレポート、最終選考に残った者(4名ほど)を対象とした面接が行われた。その後、アシスタントコーチ、スタティスティシャン(アナリスト)、マネージャーなどをその監督自身により人選される。スタッフの人選においては監督に役目があり、アシスタントコーチの数やマネージャーの人選など、どのような構成にするかはその監督のニーズにより決定される。コーチングスタッフの雇用は予算が決められており、その範囲の中で監督がコーチ陣のサラリーを協会の了承をもとに決定する。2001年から2004年までのスタッフの構成は、監督のほかアシスタントコーチ、選手権アシスタントコーチ、テクニカルコーディネーター(いわゆるチームマネージャー兼スタティスティシャン)の4人で構成されていた。それらのすべては前記したとおり、協会からサラリーが支給され、各種のベネフィット(健康保険、退職金のための投資等)が受けられる。そのほか、ボランティアコーチとして練習等を手伝ってもらうこともあり、この場合は、無償あるいは交通費等が支給される。基本的に、協会との契約は監督のみであり、協会 CEO (Chief Executive Officer = 最高経営責任者)、ならびに協会会長が監督解雇の権利をもつ。監督は、本人によるスタッフの人選とともにアシスタントコーチの解雇の権利をもつ。加えて、協会所属のスタッフたちが海外遠征でのチケットやヴィザの手配、国内外での親善試合やエキジビジョンマッチの準備や運営、または宣伝などナショナルチームのマネジメントの仕事を行っている。

このようなスタッフの選出方法・構成は日本とはかなり異なる点であるが、今後、日本でもこの方式を導入することが良いと、日本人監督の吉田敏明氏が指摘している。

③選手の選抜方法について

最終メンバーの12名は、OTC で練習している強化選手(18~22名)の中から、監督によりそれぞれの大会ごとに

選出する。これらの強化選手は基本的に以下の2つの方法により選出される。第一に、完全自由参加のオープントライアウトと監督により招待された選手のみが参加するインビテーショントライアウト。第二に、監督による直接的な招待。それらの選手のほとんどは、海外のプロフェッショナルチームで活躍している選手、また国内の大学で活躍している選手である。しかし、個人主義や個人の尊重を貫くアメリカらしく、それらの選手は、本人の意思により、それを受けるか受けないかを決定できる(注1)。

それに加え、年齢を問わずユースやジュニアの年代であっても、能力が認められると OTC に招待されトップクラスの選手と練習をともにすることも稀ではない。さらには、個人的に USA 協会あるいは監督に直接に売りこんでくる選手もいる。このようなケースは日本ではなじみがないが、USA 代表においては、当然のこととして受け止められる。監督が認めれば、その選手を呼びテストを行うこともしばしばである。こういった強化選手たち(高校や大学所属の選手を除く。)にも少なからず給料が支払われ、経験や実績を積み重ねることによって給料も上積みされていく。

④海外遠征について

アメリカ代表の場合、年によっても異なるが、基本的に4大会(ワールドグランドチャンピオンズカップ、世界選手権、ワールドカップ、オリンピック)を始め、それらの予選大会はアウェーで行われるため、常に海外遠征を行っている。例えば、昨年のスケジュールを見ると、4月にロシアでフレンドリー マッチを行い、6月上旬に Monterux Volleyball Master (スイス)、その直後にメキシコでの Pam American Cup (アメリカ大陸大会=北米のカナダから中米のメキシコ、カリブ海のキューバ、さらに南米のアルゼンチン、ブラジル当の国を含む)に出場、さらに7月上旬から約1ヶ月間 Grand Prix (タイ-香港-ドイツ-イタリア)を戦い続け、その後8月にアテネオリンピック(ギリシャ)という過密スケジュールであった(資料2参照)。

年間スケジュールとしては、年に主要な大会を4つ、さらに2つのフレンドリー マッチ(ひとつを海外、もうひとつを国内)を行うように努めているが、主要大会、または海外のプロリーグのスケジュールの関係でフレンドリー

注1) トライアウトの内容

基本的に USA 代表監督の基本的な技術論をもとに、協会所属のディレクターが選ぶトライアウトヘッドコーチ(トライアウトの指揮をとる人物)が監督との相談のもとに決める。オーバーハンドパスおよびアンダーハンドパスを始めとした基本的なボールコントロールから、レシーブやアタック等の技術、さらにゲームでの実践的プレーを二日間にわたり行う。臨時で召集されたトライアウトヘッドコーチをはじめ、トライアウトコーチやエヴァリュエーターが参加選手たちをコート内外から評価し、最終的には監督によって決定される。

マッチを予定することすら難しいのが現状である。

⑤その他

前述したように、アメリカにはプロリーグや日本のように大学卒業後にプレーできる企業チームといった受け皿が無い。そのためレベルの高い選手たちはイタリアやドイツなどのヨーロッパリーグを始め、ブラジルやプエルトリコといった南米リーグ、さらには日本リーグでの経験を求め、実績をつんでいる。実績の無い選手は、トライアウトを受け、Training TeamとしてOTCで基本技術から再度徹底的に指導され、フレンドリーマッチなどで国際経験をつんでいく。吉田敏明監督就任以後、このようなシステムにより2001年から2004年までの間に延べ100人近くの選手が実際にOTCで練習を行ってきた。このような努力が、プロリーグが無くさまざまな国でプレーする選手たちにUSA代表としてプレーする重みと競争心を植え付け、世界ランク1位を維持することができた理由といえよう。

4. おわりに

バレーボールの普及発展はプレーしたいと思う子供たちの興味から始まることです。その対象者がプレーしたいと思うようなバレーボールをみせるには「強い全日本」をつくるのが第一でしょう。日本のバレー界の好条件は、第一に、全日本のチームを国内にいる選手たちを中心に招集し、強化することができることです。他の国、特にアメリカ等では、多くのナショナルチームメンバーが海外に出稼ぎに行っているため、ナショナルチームを召集するにも金銭面での問題や、召集してチームをつくる日数が限られています。第二に、日本バレーボール協会の尽力により世界大会を常に開催国として参加できることです。他の国が、午前中や日中、夜など試合ごとに開始時間が異なるのに対し、大会期間中の試合開始時間が一定で、試合に向けて常に同じサイクルで調整できることは勝負をする上でプラスの要素だといえます。第三に、開催国として予選が免除されることも大きな利益だといえます。ワールドカップが日本でやるのは当たり前のようになっていますが、これは日本協会等々の多大なる努力だと思えます。しかし、それは欠点にもなり、海外で行われる大会での結果が思わしくないのは、多くの大会を開催国として好条件の中で戦い、時差や気候、異なる環境の中での経験が少ないことが原因の一つのように思えます。アメリカの場合は大きな世界大会に進むために、女子は中南米の強国であるキューバやブラジル、カナダ、ドミニカ共和国、プエル・トリコといった国と予選を勝ち抜くことによって本戦に進みます。男子の場合はそれら諸国にアルゼンチンやベネズエラなどが加わります。ヨーロッパにいたっては、女子の場合はロシア、イタリア、オランダ、ドイツ、ポーランド、トルコ、ブルガリアなど、男子はそれら諸国にセルビア・アンド・モンテネグロ、成長著しいフランスやギリシャが加わり厳しい予選を戦わなければ本戦に進むことができません。そうい

った、タフな条件を克服しながら戦うことで世界のレベルをより身近に感じ、高いレベルを維持しながら戦うことができるのではないのでしょうか。

上述したことは「強化」での意見になってしまうかも知れませんが、「普及・発展」といった面で考えると、全日本の強化に加え指導システムの改善が急務であると私は考えます。日本には、技術の理論や指導方法だけでなく、規律やチームワークをバレーボールを通じて指導できる素晴らしい指導者がたくさんいます。特に、中学や高校の指導者のレベルは世界と比べても非常に高いものでしょう。そういった優秀な指導者の能力を生かすためにも、どういったレベルの指導者であれ理論と実績を生かし、いずれトップリーグで指導できるような現場で生かせるライセンスを設けることです。例えば、日本で得るその特別資格はFIVB公認であり、その資格を取得した指導者は、世界のトップリーグでも指導できる資格があるというものです。このような世界に通じる指導プログラムを確立することは、バレーボールのレベルだけでなく指導者の価値、そして責任感を高めることができるのではないのでしょうか。これはただ資格を与えれば良いというわけではなく、その資格を生かせるだけの内容と受け皿が無ければ意味がありません。

将来的に、Vリーグのチームが企業チームとしてでなく、クラブチームとして都道府県や各スポンサーなどと手を組み、チーム運営ができることが理想です。そうすることにより、ジュニアユースやジュニアなどの育成システムの向上、また、クラブの強化や運営が必要となるでしょう。このような環境は、一貫した指導で選手を育成できるとともに、所属選手を育てる指導者においても、指導力や結果が直接責任として問われるような、プロフェッショナルな環境を生み出すのではないのでしょうか。

これはアメリカでもいえることですが、常時世界のトップレベルで戦う基盤を築くためには、興味を持った多くの子供たちを確保し続け、指導者がステップアップできるようなシステムが必要だと思えます。こうした底辺の拡大は、継続してバレーボール人口を増やす一つのきっかけとして「普及・発展」への後押しになると考えます。

資料1

ディビジョンI・II・IIIの違い (NCAA ルールより)

【ディビジョンI】

DIに属する学校は、男女各々で2つの団体競技を持つとともに、少なくとも男子7競技種目、女子7競技種目(または男子6競技種目、女子8競技種目)のスポンサーを務めなければならない。決められた基準の中で、各々のスポーツで定められた最低限の試合数と参加者がいなければならない。アメリカンフットボールとバスケットボール以外のスポーツにおいて、DIの学校は、DIの相手と規定試合数以上の試合を行わなければならない。また規定試合

数を超えて試合を行う場合、そのうちの50%はDIと対戦しなければならない(例えば、規定試合数が16試合だとすると、同じDIのチームを相手に最低16試合行い、さらに8試合、試合を行う場合、そのうちの4試合はDIのチームと試合をしなければならない)。男子と女子のバスケットボールチームは、2試合以外、全てDIのチームとプレーしなければならない。またDIの男子チームにおいては、総試合数の1/3をホームアリーナで競技しなければならない。DIまたはDI-Aクラスとして分かれているアメリカンフットボールのチームを持っている学校は、公平かつ精巧なプログラムによって区分される。DI-Aのチームは求められている観客数を最低限、動員できなければならない(ホームゲームにおいては17,000人、または4年間の間に少なくとも全ての試合で平均20,000人動員すること。さらに常にスタジアムに30,000人収容できるシートを用意できることなど。

DI-AAチームは、求められる規定動員数を設けていない。DIの学校は、彼らの競技プログラムのために必要な最低限の運営資金が必要である。そして各々のスポーツにおいて運営資金の上限も定められている。それを超える

ことはできない。

【ディビジョンII】

DIIに属するチームは、男女において2つの団体競技を含め、少なくとも各々4つの競技種目のスポンサーを務めなければならない。決められた基準の中で、各々のスポーツで定められた最低限の試合数と参加者がいなければならない。アメリカンフットボールと男女バスケットチームは、少なくとも50%の試合をDIIおよびDII-A、DII-AAの相手と行わなければならない。フットボールとバスケットボール以外のスポーツにおいて、スケジュールの基準はない。フットボールチームにおいても、最低限求められる観客動員または、スタジアムの収容規定などもない。DIIに所属する学校においては、各々のスポーツにおける運営資金の上限が定められている。それを超えることはできない。DIIには大抵その大学の地域かその州の学生アスリートが多いのが特色である。多くのDIIアスリートはスカラシップ・マネー(優秀なスポーツ選手に与えられる奨学金)、学生ローン、さらに学校内で働いて稼いだお金などの組み合わせによって払われる。DIIの運動部における

	S	M	T	W	TH	F	S	S	M	T	W	TH	F	S	S	M	T	W	TH	F	S	S	M	T	W	TH	F	S	S	M	T					
					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
JAN																																				
FEB	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29							
MAR	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31					
APR					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30		
MAY					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
JUN					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30		
JUL					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
AUG	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31					
SEP					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30		
OCT					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
NOV	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30						
DEC					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30		

資料 1

資金は、学校内のほかの学部と同様に各大学の学校の経費によって賄われている。地域的に行われるDIIのレベルでは、運営プログラムもその範囲内で計画され行われる。

【ディビジョン III】

DIIIに属する学校は男女において2つの団体競技を含め、少なくとも各々4つの競技種目のスポンサーを務めなければならない。決められた基準の中で、各々のスポーツで定められた最低限の試合数と参加者がいなければならない。DIIIのアスリートは彼らの競技能力に対して払われる奨学金=スカラシップ・マネーを受け取ることや大学でほかのいくつかの学部のように基金を出されるという基本的な規則がない。払ってもよいが、基本的にDIIIで行う選手は奨学金をもらってプレーするという概念をもって行っていない。DIIIの競技連盟の特別重要な部分は、観客のようなレクリエーション的な概念でスポーツ競技に参加するということである。学生アスリートの経験が最も重要なこととして考えられる。DIIIのアスリートは沢山の数とバラエティーに富んだ競技者としての経験を学生として最大限に参加できることである。それが競技連盟における大会やシーズンで最も強調されるところである。

2. カナダのバレーボール事情

宮下 直樹

(カナダ女子ナショナルチーム・アシスタントコーチ)

1. 基本的な事情

1) 協会組織について

カナダバレーボール協会はオタワにあり、男女シニアチームの活動拠点はマニトバ州のウィニペグ市にあるマニトバ大学です。このオフィスにはディレクター1名・コーディネーター2名・男子監督・アシスタントコーチ1名・女子監督・アシスタントコーチ1名の7名が常駐しております。何故マニトバ州で活動しているかですが、チームカナダにはオリンピックを強化する為の施設がありません。4年ごとのオリンピックサイクルで各州に打診され、バレーチームの活動をサポートしてくれる州・都市にお願いしオフィスを構えそこで活動することになるのです。

諸外国(ヨーロッパ・アメリカ等)においてはオリンピックセンターを持っている国があり、何種目かの競技がそこで強化を図るシステムになっています。そこではすべての競技に合った食事管理がなされ、ハイテクによる解析分析が行われ強化されています。そして治療の面においても先端器具を揃えており、選手が安心してスポーツに打ちこめるようにケアされ、オリンピックでの競技成績の向上を目指しているようです。

また、2008年以降のチームカナダのホームコートに関

しては未定となっております。協会が新たにサポート出来る州への打診を行い条件が整った段階で決定となる。当然男・女が異なる都市での活動になることもあります。

2) VB人口について

カナダでのバレー人口ですが、女子中・高生にとっても人気があり大勢プレーしています。バレーを始める年齢は中学に入ってからスタートします。日本と最も違う点は学校単位のチームだけでなくクラブシステムが普及していることです。こちらでは、2シーズン制になっており9月～11月までが学校単位での活動となり、1月～5月まではクラブ単位での活動となります。こちらの子供達は時期により違うスポーツを行う事が通常です。

①学校単位

学校でのチーム編成は年齢別にチームを作り、大会に出場します。例えば部員が30名であれば3チームを作りレベル分けされ、全員試合に参加させます。当然レベルに違いはありますが、皆それぞれ勝つ事だけが目的ではなく、試合に参加しゲームを楽しむ事ができるのでバレー人口が多いのではないのでしょうか。試合は毎週末に行われ中学生は必ず保護者が送り迎えをするので観戦しますから、その時自分の娘がプレーしていれば運動会と同じ状況、すなわちレベルがどうであれ熱が入った応援になります。

男子に関してカナダはホッケーが一番人気です。時期的にちょうど重なりますのでプレーする人数は女子のように多くは在りませんが、ホッケーとバレーボール両方を選んで活動する者も少なくありません。

②クラブ単位

クラブについては、年齢とレベルに分けてチームごとでトライアウトが行なわれ選手選考されていきます。この段階となると少しでも強いチームに入りプレーをし、5月に行われるオールカナダクラブ選手権での高成績に向けて凌ぎを削ります。クラブ単位での指導と言っても、週2回で2時間の練習ですので日本のレベルには到底達していませんが、日本の厳しく休みも無く毎日4時間以上もの練習はしませんので、バレーボールが嫌いになったりはしません。

3) 指導者組織について

カナダでの指導者ライセンスはレベル1～5に区分されています。

①レベル1；バレーボールの練習における基本的概念の紹介と練習計画が立てられる。(地域レベル) ②レベル2；基本技術指導と試合上のマナー、練習計画、試合の運営ができ、チームと選手の正しい評価がつけられる。(学校レベル) ③レベル3；技術の向上を目的とした指導ができる。(クラブレベル) ④レベル4；より一層集中的な技術の向上を目的とした指導ができる。(全国レベル) ⑤レベル5；選ばれたコーチだけが受けられるインターナショナルレベル指導者用プログラム。個別にプログラムが用意される。

また、このライセンスを取得している監督・指導者でな

ければ、学校並びにクラブチームにおける正式な大会への出場は出来ません。しかし、練習などの指導に関しては、ライセンスは無くても指導は出来ます。

2. 普及面

1) 中・高校における VB 活動について

練習日と時間：平日に2回の練習で2時間行われます。試合は金・土曜日に行われ日曜日には基本的には行われません。金曜日は6:00PMから男女1試合づつ行われ、土曜日は終日リーグ戦形式で25点の3セットマッチ、3セット目は15点、高校生では、25点の5セットマッチ、5セット目は15点で行われます。

2) 大学における VB 活動について

練習日と時間は月～土曜まで2時間から2時間半とウェイトトレーニングを行います。試合シーズンは9月～2月までで、カナダは国土が広いので西地区はブリティッシュコロンビア・アルバータ・サスカチュワン・マニトバ州の9チームです。東地区は3つに分けてあり、オンタリオ州・ケベック州・アトランティック（ニューブランズウィック・ノバスコシア州）で、それぞれリーグ戦形式での試合が行われます。9月～10月中旬まではプレシーズン（練習試合形式）であり成績にカウントされません。

10月中旬からリーグがスタートし2月にそれぞれの各地区でのプレーオフが行われ上位のチームがカナダナショナルへの出場権を獲得します。特筆すべきは、毎年カナダチャンピオン大会に選ばされるチーム数並びにルールが毎年改正されることである。

今年度は3月の第1週の木・金・土曜日にサスカトゥーンにおいて大会が開催されます。西地区から上位3チームとホスト1チーム、東地区からオンタリオ1チーム・ケベック2チーム・東海岸1チームの合計8チームによって決勝トーナメントが行われオールカナダナショナルチャンピオンが決定されます。

3. 強化のプログラム

1) カナダ国内のトップリーグについて

カナダ国内でのトップリーグは、男・女とも大学生の大会が最高峰となっています。

9月からリーグがスタートし3月上旬のプレーオフ。これが最後のメインイベントです。決勝戦はカナダ全土に中継されます。ここカナダでは、プロチームの存在はありませんので、大学卒業後は皆ヨーロッパ・南米にあるプロチームとの交渉がエージェントを通じ行われ、成立すれば契約選手としてプレーしています。ちなみに、カナダのプロ選手としてのプレー先は、イタリア・スイス・フランス・ドイツ・オランダ・スペイン・スウェーデン・ブルトリコ・インドネシア・日本・ブラジル・オーストリア・オーストラリア等、多くの国で活躍しています。

男子選手については、ほとんどの選手がカナダ国内の大

学でプレーをした後、諸外国へ行きプレーをしますが、女子選手に関しては大きな問題があります。良い選手は高校卒業後よりよいバレーボール環境を求めて米国の大学へ進学してしまう事です。米国には優遇された推薦制度があり授業料・アパート代・食費・車まで大学から与えられます。カナダの大学でここまで出来る制度はありませんので結果的に良い選手がかなり米国へ流出してしまうというのが実情です。この流出問題がカナダの大学のレベル低下のみならずナショナルチームの活動にも影響を与えています。米国の大学へ進学すると、シーズンが8月から12月までなのでカナダナショナルチームの活動時期と重なりプレーが出来ないので4年の間、国際試合などでの経験を積ませることが出来ない事になってしまいます。

2) カナダナショナルチームについて

私は、2001年から女子ナショナルチームのアシスタントコーチとして就任しており足掛け4年が経ちました。男・女ナショナルチームの本拠地はウィニペグ市のマニトバ大学で活動しておりますが、カナダにこんな名前の都市がある事をほとんどの方は知らないのではないのでしょうか。

女子の活動を中心に述べて行きたいと思います。監督の選出は、チームカナダにナショナル委員会（10名程）があり、そこで監督の選考がなされます。監督の選出方法を具体的にみると、まずカナダバレーボール協会から、インターネット等を通じてナショナルチーム監督の公募が行われます。そこで、監督に応募したい者は、履歴書を作成し、これまでの経歴並びにセールスポイントをレポート用紙にまとめ協会に提出します。このレポートは日本で市販されている経歴だけを簡単に記入する履歴書だけではなく、最低レポート用紙5枚以上に今まで行って来た事や、バレーボールに対する考え方をアピールする必要があります。ちなみに応募する多くの人の書類には、最低10枚以上の自己アピールが記載されております。応募された人達の書類審査は、先ず協会幹部並びにナショナル委員会の人達によって協議が行われます。そして、最終的に残された若干名の人が、協会並びにナショナル委員会メンバーの人達と個人面接を行います。その後最終協議が行われ、その結果が本人に通告されます。

次に、監督以下のスタッフ選出に関しては全て監督に決定権が与えられております。現在のスタッフはアシスタントコーチ・トレーナー・フィジカルコーチが常勤しており、その他メンタルコーチ・ドクター・栄養士がおります。

選手の選出については、毎年4月にトライアウトキャンプが1週間開催されます。選手は監督から事前に受けるように打診されたりしますが、全員自費での参加となっています。そして最終日に監督との個人面接が行われ、選考の結果が通告されます。

そこで、選手のトライアウトについて詳しくみてみる

と、毎年チームカナダのトライアウトキャンプは開催されておりますが、2種類のトライアウトキャンプがあります。先ず1つは、誰でも自由に参加できるオープンキャンプ。そしてもう1つはクローズドキャンプ、これはこちらから指名した者だけによるトライアウトキャンプです。どちらもトライアウトキャンプを受ける為の費用については、全額自己負担によって行われます。トライアウトキャンプに関して、監督に全て主導権が有りどちらのスタイルで行うか決定がなされます。

期間は2週間ありますが、最初の1週間はプレキャンプなのでこれは自分で前もって体を動かし少しでもコンディションを良くする為に行われるものなので、体力及びスキルテストなどは行いません。そして翌週にメインキャンプが1週間開催されます。このトライアウトキャンプの為に特別コーチとして大学の監督が招聘されますので、チームカナダ監督を始めコーチ陣・スタッフは総勢10名近くとなり、毎晩ミーティングを行い選手選考の為のディスカッションが繰り返されます。

メインキャンプでは、先ず始めに簡単な体力測定を行います。身長・体重・指高・体脂肪率の測定・スタンディングジャンプ・アプローチジャンプ・ブロックジャンプ・3ステップジャンプ・4KGのメディシングボール投げ・25M走などです。また、昨年参加した選手については、昨年と今年の比較をします。

午前中に個人的なボールスキルを見極める為の練習を行い、夜ゲーム形式を中心にプレーさせその中で個別に毎日のデータを取り集計をしていきます(スパイク・ブロック・サーブ・ミス等)。そして、そのデータをもとに、毎晩練習終了後コーチミーティングを行い選手のポジティブな面、ネガティブな面等の話合いが行われ選手選考の材料として判断されます。キャンプ最終日に、監督と私が参加選手全員と個人面接を行い、そこで最終通告をするのですが、とても辛いのがカットとなった選手にその旨を通告することです。

当然、選手も自費で参加しているので、自分自身で納得が出来なければ何故カットされるのか説明を求めて来ますので、その理由を伝える為には長時間の面接となることもしばしばあります。限られた選手枠(約16名)しか有りませんし、毎年新人その他外国でプレーしていた選手も成長し参加してくるので、昨年選ばれたからと言っても今年は落とされるという厳しいケースも当然出てくるわけで、安閑とはしてられません。

選手強化面についてですが難しい問題点がいくつかあります。まず第1に前述の米国の大学が好条件での推薦制度を条件にカナダの選手を獲得してしまう為、4年間はカナダナショナルチームでの選手強化が図れない事。また大学卒業後カナダでのプロチームが存在しない為に活動する場所がない事です。

次に、女子の指導に関して、カナダでは日本のように欠

点を指摘しそれを少しずつ修正して行く方法は、受け入れられません。例えば練習で簡単な動作を毎日繰り返し行なわせていると、このコーチは指導力が無いと判断されるし、選手もそう思っていることです。

日本での指導方法について部分的な練習に多くの時間が割かれている点と自分たちのコートすなわちネットを挟まない練習が多い点、欧米では部分的な練習よりも試合を想定しネットを挟んでの練習が行なわれチーム的な練習をする事が効率的に選手が伸びると考えられている点が違います。

ここカナダの指導者達は、日本の事をどう見ているかと言うと長い時間の練習をし、体罰を与え一方通行的に指導していると思っている人が多いです。そして監督は体育館でタバコを吸いながらベンチに腰を掛けて指導していると思っています。

日本の選手は、ボールコントロールが素晴らしいととても上手である。何であんなに正確に思ったところにボールを返せるか不思議がります。バスの正確さはアジア人だけが持つ指先までの繊細な神経が通っていることの証なのではないでしょうか。カナダで指導をしていて特に感じる点は、思った所にボールを運べない、すなわちレシーブが下手であると言う点です。

男子のブラジルチームはとてもボールコントロールが上手です。外人が本来持っているパワー&高さに正確なボールコントロールが備わってしまうと外国勢を打ち負かす事は難しくなります。

私が、カナダの男子チームの練習を見て感じることは、この1点です。この選手たちにレシーブ力がつきボールコントロールが出来ようになったら世界のトップで活躍するだろうと感じます。なにせ高さ&パワーは申し分ないからです。

カナダの女子は、まだまだ発展途上にあるとおもいます。高さ+パワーに関しては世界でも通用する要素はありますが、体力強化の面で大きなハンディがあります。アスリートとしての体型では有りません。世界で戦う強い意識・目標設定が明確に出来ていないために、厳しい練習が続くと何かしら理由をつけて休み、継続する事が出来なからです。体力や筋力がなければ、技術の習得もできません。プロに行く選手もいますが、外国のトップチームではプレーしていませんので厳しさがありません、世界のトップ選手と一緒にプレーすること、または見る事により自分自身のプラスになり、より素晴らしい技術を習得できるのですが、長い期間プレーすることや厳しいところは好みません。まずは、意識改革を行い世界のトップレベルで活躍出来るよう、そしてオリンピック出場への強い決意がなされメダルを獲得することが目標になればカナダは変貌するでしょう。

4. 日本の普及発展に対する方策について

私が、日本の発展に関して論ずることかどうか解りませんが、折角国内でのVリーグがあるのですから、そこにヨーロッパからプロチームを1~2チーム招聘しVリーグ戦に参加させることができれば外国勢に立ち向かう姿勢が出来、面白いゲームとなるように思います。または日本からイタリア・ブラジルなどプロリーグに何名かの選手・指導者を登録させてもらう事や1~2チームをリーグに参戦するのはどうでしょうか。

海外での長期滞在をしながら試合を消化して行くことにより日本の指導者は、世界のバレーボール情勢もわかるし、ヨーロッパ等の指導スタイルが学べるのではないのでしょうか。また、選手はプロで活躍する外国選手と一緒に暮らすことによって生活・習慣の違いなどが身近に解り、改めて日本での企業スポーツの有り難さや素晴らしさを実感出来るのではないのでしょうか。

何故今や日本がヨーロッパに勝てなくなったのかを問いただす為にも、外人選手を日本でプレーさせるだけではなく、今後は選手だけではなく指導者も一緒に自ら進んで外国に進出し学ぶ事で、新しい指導方法の導入並びに今まで行って来た日本の指導方法の良い点を再確認出来ると思います。これを踏まえて指導・プレーしていく事が日本のバレーボールの発展につながると思います。

3. オーストラリアのバレーボール事情

吉田 清司 (専修大学)

1. オーストラリアの概要

オーストラリア大陸に先住民アボリジニの祖先が住みつけたのが約4万年前です。16世紀には「テラ・オーストラリス (未知なる南の大陸)」と呼ばれ、多くの探検家を虜にした大陸がオーストラリアでした。人々は夢と理想をこの大陸にかけて移住し、開拓に励みました。1901年にオーストラリア連邦としてイギリスから独立し、人口は2千万人に満たない国ですが、国土面積は日本の約22倍あります。

比較的歴史の浅い国ではありますが、建国後、スポーツが国家のアイデンティティを形成してきたと言われます。オーストラリア人は非常に活動的で、豊かな自然のもとであらゆる種類のスポーツを楽しんでいます。日本では一般的に、学生時代にスポーツをしていても、いったん社会人になるとスポーツから遠ざかってしまう人が多いなか、オーストラリアでは様子が違います。大人になってからもスポーツを続け、ローカルな試合を熱気いっぱい繰り広げています。子供の頃から「スポーツを楽しむ」感覚でプレーをしている人たちが、オーグスポーツの底辺を支えていると言えます。

2. オーストラリアのスポーツ政策

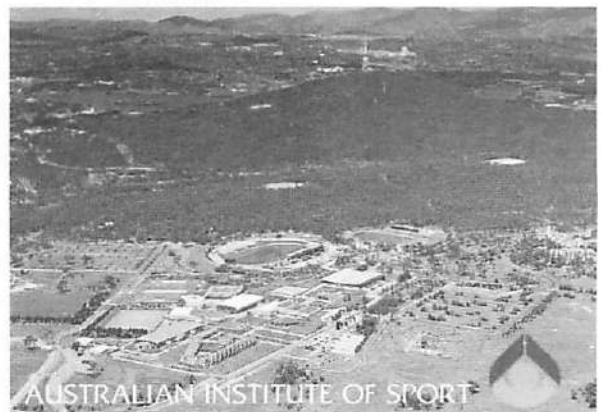
恵まれたスポーツ環境にあるオーストラリアですが、今から約30年前の競技スポーツ界は悲惨な状況にありました。同じ英連邦の国であるカナダで開催されたモントリオール五輪(1976)で、オーストラリアは金メダルゼロに終わり、当時の国民に大きなショックを与えました。それ以降、オーストラリアは連邦政府主導によるスポーツ政策の改革に着手しました。選手強化に大きく貢献した要因の一つに、ナショナルトレーニングセンターの機能を果たすAISの存在があげられます。

AISとはAustralian Institute of Sportの略称で、直訳すればオーストラリア・スポーツ研究所ですが、その機能、目的は実質のナショナルトレーニングセンターです。モントリオール五輪の結果を憂慮し、スポーツ大国の復権を目指して1981年、首都キャンベラにAISを設置しました。AIS設立以来、国際大会では多数の五輪メダリストや世界チャンピオンを生み出してきました。昨年のアテネ五輪では、自転車、ホッケー、飛び込み、競泳、ボート、射撃の種目で金メダルを獲得しました。総メダル獲得数は49個で、日本の37個を上回っています。

AISは26競技、35種目のスポーツを強化しています。現在、AISはキャンベラ以外にも各州に施設をもっています。本拠地キャンベラAISは敷地面積65ヘクタールの中に各種競技施設、スポーツ医科学センター、スポーツ情報センター、選手寮などがあります。

キャンベラAISでは国内トップレベルのアスリート、または将来性のあるジュニア選手約700名が、日夜トレーニングに励んでいます。選手たちは一般公募で、マスメディアを通じて募集を呼びかけられ、自分の意思で種目のテストを受け、大会での記録を参考に選考されて、AIS奨学生になります。

AISは学校ではありませんが、選手には個々の学業成績や志望コースに応じて、地元の小学校から大学までを紹介、推薦されます。そのため、オーストラリアのトップアスリートが自分の学校でトレーニングすることはほとんど



敷地面積65ヘクタールキャンベラ AIS 全景

ありません。彼らは AIS の世界最先端の競技・トレーニング施設を利用し、専任コーチ・トレーナーの指導を受けるだけでなく、スポーツ医科学専門家のサポートの下で競技力向上を図ります。また、選手が学業や職業、家庭生活を心配することなくトレーニングに専念できるよう手助けするセクションもあります。AIS 奨学生に選出されると、表1のような恩恵を受けます。

表1 AIS アスリートが受ける恩恵

- ・ AIS の競技・トレーニング施設の利用
- ・ 専門種目のコーチング
- ・ スポーツ医科学のサポート練習
- ・ 競技用具の無料支給
- ・ 遠征費用の支給
- ・ 無料の寮・食事提供
- ・ 学費・奨学金の支給
- ・ ACE(職業・教育)プログラムのアドバイス

AIS には ACEプログラム (Athlete Career and Education Program) と称する選手の職業・教育プログラムがあります。AIS の中に学校はありませんが、地元キャンベラの教育機関と密接な関係をもっているため、学業を続けながらトレーニングに励んでいる選手がたくさんいます。別の都市で大学に通っていた者には、キャンベラ市内の大学に移籍ということが可能となります。また、就学していない選手に対しては、職業訓練やフルタイム、パートタイムの就職斡旋サービスも行っています。さらにこのプログラムでは、生活研修トレーニングが AIS の全選手に提供されています。これはバランスのとれたスポーツ選手を育成するため、パブリック・スピーキング (講演会などでのスピーチの仕方)、インタビュー・スキル (記者会見での対応技術)、面接訓練、就職カウンセリング、レポート作成法、タイム・マネジメント、コンピュータ・スキル、スポーツ情報センターの活用法などのコースが、専門スタッフによって講義されます。このように AIS ではスポーツと同様に教育、仕事の重要性を認め、奨励しています。オーストラリアのスポーツシステムの特徴は、旧東欧国に代表された国威発揚のためのシステムではなく、資本主義社会の中で個人主義を尊重しているシステムだという点にあると思います。

3. バレーボールの普及・育成プログラム

オーストラリアの子どもたちは、日本のように自分の学校のクラブでバレーボールをすることはほとんどありません。あくまでもバレーボール活動は地域クラブ、学校は勉学という具合に分かれています。練習時間は少なく、12歳から18歳位では週に2回程度の練習で、州選抜に選ばれた選手でも週3回程度です。大学リーグや成年の国内リ

ーグも盛んではありませんから、大人になってもこのトレーニングベースは変わりません。ただし、ジュニアやシニアのナショナルチームに選抜されたりすると、キャンベラ AIS に移籍して、週6日のトレーニングをします。ですから、オーストラリア国内で週6日トレーニングをするバレーボールは、キャンベラ AIS を拠点とする30名足らずの選手しかいないことになります。

指導者に目を移せば、オーストラリアはスポーツコーチ養成・公認制度が非常に整備され、AIS を頂点とするピラミッドの概念を徹底させて、系統だった一貫指導が可能となるようコーチ養成にも力を注いでいます。ACC (オーストラリア・コーチング評議会) によって、年間100人程度が認定を受けるコーチ資格は、系統的に基準が設けられています。子供や青少年のスポーツ活動をアシストするレベル0から、ジュニアやシニアの代表コーチに至るまでのレベル1~3に分類されています。当然、AIS のコーチたちは全員レベル3の資格を取得しています。指導理念という分野でも、しっかりとトップを頂点とするピラミッドの概念を徹底させ、一貫指導が可能となるようコーチ養成に力を注いでいます。

つまり、日本のように選手強化が中学、高校、大学などに進むにつれて指導者や指導方法が異なり、系統だった育成ができにくいといった環境にはありません。日本ではまだ指導者の立場、経験、技能、理念もさまざま、個人に任されている部分が多いのが現状です。選手は中学や高校の段階でそれぞれ独立して完結されるため、素質や将来性が適切に考慮されないで伸び悩んでしまう場合があります。個々の指導者がどんなに頑張っても、選手育成全体のイメージを統一するのは容易ではありません。バレーを例にあげれば、将来全日本のセッターになれそうな長身選手でも、チームの事情からアタッカーを務めなければならないということはよくあります。日本では「一貫指導」の言葉はあるものの、各年齢期の競技会に勝つことを重視した育成法のため、精神的な燃え尽きや肉体の使い過ぎの弊害も問題視されています。もちろん文化の違いがありますから、オーストラリアのシステムを日本に容易に適用できるものではありません。しかし、協会主導でしっかりと方向づけし、制度改革していけば、日本でも長期的な視野に立った一貫指導は可能と思われる。

4. ナショナルチームの強化プログラム

オーストラリアでは第一次大戦後にバレーボールが紹介され、1963年にオーストラリアバレーボール協会が創設されました。特に女子バレーボールは、ネットボール (ドリブルのないバスケットに似た競技) に次いで国内で2番目に盛んなスポーツです。地域の青少年チーム数は他のスポーツと比較して最も多く、学校スポーツのプログラムにも積極的に取り入れられてきました。

ところが、オーストラリアチームは長い間、アジア地区

で後塵を拝してきました。東京五輪においてバレーボールが正式種目として採用されて以来、アジア地区のチームは金メダル5個を含めて、男女合わせて14個のメダルを獲得してきました。強豪ひしめくアジア地区の中で、オーストラリアのバレーボールはレクリエーションとして親しまれてはきたものの、厳しい練習を積み重ねるチャンピオンスポーツとしてはなかなか定着してきませんでした。

しかし、1981年のAISが設立されて以来、バレーボール強化の状況は変わってきました。AISバレーボールプログラムは男子がシドニーを拠点として1990年に始まりました。女子プログラムは、1993年に設立されて、最初は西部都市のパスに拠点を置きました。1997年からは、男女両方のプログラムともキャンベラAISを本拠地としています。

オーストラリアには日本のVリーグのような国内リーグがありません。すべてのナショナルチーム選手はAISから奨学金をもらって生活しています。さらに実力のある選手は、国際試合のシーズンが終わると海外でプロ選手としてプレーすることを許可され、報酬を得ています。プロ契約していない選手はAISをフルタイムのトレーニング拠点としています。ですから、年間を通してAISでトレーニングをする選手は、これからプロを目指すジュニア期の選手が中心となります。

ナショナルチームのスタッフはすべて専任のプロ契約です。監督は公募され、協会との面接によって決定されます。監督をAIS常駐のアシスタントコーチ、スカラシップコーチ（国内からの研修コーチ）、パフォーマンス・アナリストコーチ（練習中のビデオと統計分析、試合中の詳細な相手チームのスカウティングと統計分析、試合後のビデオ分析担当）らが支えます。

アテネ五輪後に男子監督にはラッセル・ボジャードが就任しました。ラッセルは1994年から2002年までクイーンズランド・スポーツアカデミーの監督でした。その間、2000年シドニー五輪・ビーチバレーボール金メダルのナタリー・クックとケリー・ボサーストをコーチしました。また、1995年から98年まで男子ジュニアナショナルチームの監督も務めています。ラッセル自身もかつてナシヨナ

ルチームでプレーしており、国際試合を153試合も経験しています。1990年には男子のプレーヤー・オブ・ザ・イヤーに選出されました。

女子監督は、アテネ五輪後に元中国代表で、ソウル五輪銅メダリストの姜英が就任しました。姜英は中国代表を引退後にオーストラリア国籍を取得し、長く南オーストラリア州代表チームの監督を務めてきました。その間、ジュニアナショナルチームのスタッフとしても協会をバックアップしています。かつてのチームメイトである郎平（アメリカ女子監督）とともに、アジアの緻密なバレーがどれだけチーム力をアップできるかに注目が集まっています。

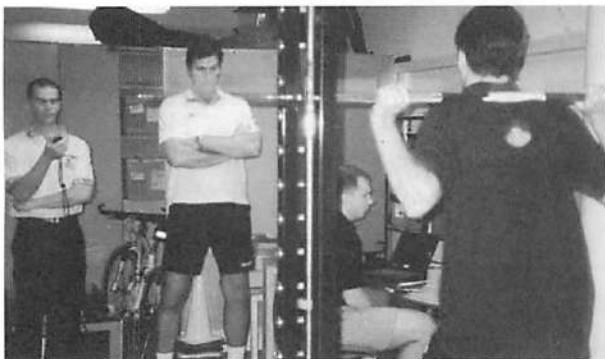
2005年3月現在、オーストラリアの世界ランクは男子が23位、女子が36位です。世界ランクはワールドリーグやワールドグランプリのポイントも加算されるため、これらのトーナメントに参加していないオーストラリアの世界ランクは日中韓より低くなっています。しかし、男子チームの実力は現在アジアナンバーワンです。シドニー五輪ではアジアチーム最高の8位入賞を果たしました。昨年のアテネ五輪アジア予選でも日本、中国、韓国を破り、トップで予選通過しました。10名のAIS奨学金がプレーした男子ユースチームは、2003年世界ユース選手権で8位に入賞しています。

女子チームは6人制よりむしろ、ビーチバレーで輝かしい成績を上げています。四方を海に囲まれているので、海岸リゾート地ではビーチバレーが手軽にできます。1991年にはFIVBビーチバレーワールドシリーズのホスト国となるなど、国内では人気種目です。ケリー・ボサースト、ナタリー・クックのペアはアトランタ五輪で銅メダル、シドニー五輪ではオーストラリアバレーボール史上初の金メダルを獲得しました。

5. 欧州クラブとの連携について

選手やチームが一定レベルのパフォーマンスを維持するためには、普段のトレーニングの場である所属クラブの環境が重要となります。アテネ五輪での上位国に共通していることは、ほとんどの国の選手が欧州クラブでプレーしている点です。現在の世界のバレーは欧州中心で動いているといっても過言ではありません。欧州から遠いオーストラリアでも主力選手は欧州クラブに所属してプレーしています。現在、欧州のプロクラブでプレーするオーストラリア選手は10名います。（表2）

欧州リーグの場合、外国人選手枠はオン・ザ・コート2名でプレーできます。また、EU圏内の選手は外国人選手としてカウントされないため、欧州の国内リーグはさまざまな国籍の選手が一つのチームでプレーすることが可能です。ですからオーストラリア選手にとっては、日本のVリーグよりイタリアやドイツリーグの方が条件面で折り合いが付きやすいのが現実です。欧州クラブの選手たちは各国のリーグ戦で高いレベルの試合を経験し、自国の代表チ



AISでスポーツ科学のサポートを受けるバレーボール選手

表2 ヨーロッパクラブで活躍するオーストラリア選手

国名	ディビジョン	クラブ名	選手名
Italy	A1	Coprasystel Ventaglio Piacenza	Zane Christensen
Italy	A2	Brillrover Sudtirof Alto Adige	Ben Hardy
Italy	A2	API Pallavolo Verona	Dan Howard
France	Pro A	AS Cannes	Andrew Hunter
Spain	Superliga	CV Vigo	Andrew Earl
Germany	1.Bundesliga	TSV unterhaching	Brett Alderman
Germany	1.Bundesliga	SV Bayer Wuppertal	Luke Campbell
Germany	2.Bundesliga (South)	SV Fellbach	Vlad Baltovski
Germany	2.Bundesliga (North)	VfL Lintorf	Andrew Dwyer
Germany	2.Bundesliga (North)	VfL Lintorf	Jonathon Hague

ームに持ち帰り、強化に役立てています。この強化システムの良さはアテネ五輪でのブラジルやアメリカによって証明されています。オーストラリアも同様に、毎週開催される欧州リーグにおいて、常にナショナルチームレベルの戦いを繰り広げ、プロの攻撃的なゲームや、普段のトレーニングに加わることによって実力向上を図り、その成果をナショナルチーム強化に繋げているわけです。

欧州クラブでは、スタッフ・選手はフルタイムのプロ契約です。会社の勤務がないため、彼らは1日2セッションのトレーニングをこなすことができます。通常、午前中にウエイトを中心とした体力トレーニングをし、約4時間の休憩をはさんで夕方からボールを使った戦術中心の練習を行います。各セッションの時間も最大2時間半程度で、集中したトレーニングを行うことが可能です。

日本のVリーグに目を移せば、男子は1チーム20名前後の選手で、1日1セッションのトレーニングが一般的です。多くのチームが午前中は会社に勤務し、午後からボールを使った練習と体力トレーニングを1セッションで消化します。選手にパワーアップと障害予防のための体力強化の必要性を説いても、1日1セッションのトレーニングではなかなか体力トレーニングに時間を割けないのが実情でしょう。

また、欧州はバレーボールマーケットが発達しているため、日本の企業チームのように1社の財源に頼るのではなく、複数のスポンサーの融資によってクラブが運営されています。選手・スタッフは会社員ではないため、引退後のセカンドキャリアの心配はありますが、その分、プロとしての厳しさを享受する充実感を彼らには感じます。

このようにして見ると、日本は欧州クラブとナショナルチームを連携させる世界の強化の潮流から取り残されてしまった感があります。現状ではVリーグとイタリアリーグとの間には大きな差があり、それがそのままオーストラリアと日本のナショナルチームの実力差になっていると思われる。

日本のレベルアップのためには、Vリーグの外国人枠を広げたり、韓国・中国を巻き込んでアジアリーグに拡大す

るのも一案でしょう。アジア予選を勝ち抜いた欧米タイプのオーストラリア選手を外国人枠として扱わないなどの規約改正も考えられます。

オリンピック出場を3大会連続で逃した日本は、さまざまな改革が必要ですが、ナショナルチームの強化のためにはVリーグのレベルアップが必要不可欠であることを強調したいと思います。

4. ヨーロッパのバレーボール事情

—フランスを中心に—

足立 龍哉 (FIVB 公認コーチインストラクター)

1. 基本的事項

協会組織／歴史・VB人口・指導者組織などの本題は、筑波大学・松田氏のプレゼンテーション(バレーボール研究第5巻)を参照してください。

2. 普及面(育成政策を含む)

1) 小・中・高校(学齢期)におけるVB活動(練習時間・試合形式・指導者等)

ヨーロッパの環境について述べますが、一般的にヨーロッパは日本とは教育制度が大きく異なることを前提にお読みください。また、「一般的に」とことわりましたが、ヨーロッパ全体を「ヨーロッパ」という一単位で論じることにも強引です。各国・地域によって文化、言語はもちろん、教育年次、カリキュラム等が異なりますし、それぞれに特徴があるからです。ここではその詳細については割愛させていただきますが、日本のそれとの対極としての「ヨーロッパ」としてご理解ください。

それらを踏まえた上で第一印象として強く感じる事は、「ヨーロッパ」において、子ども達には十分な時間があるという点です。その理由のひとつには授業カリキュラム体系があるでしょう。国によって差こそありますが、公立の一般中学校、高校では、昼過ぎまでには下校できます。し

かしながらその後の時間の学校施設を有効に利用するような、日本での課外活動(部活動)*にあたるものがほとんどありません。また、日本にある「体育」にあたる授業がほとんどありません。それに代わるものとして、週に一回程度、生徒を体育館やグラウンドで自由に遊ばせるといったことがあたるでしょうか。生徒の学齢が上るにつれて、授業的なものから生徒が自主的に行うレクリエーション志向が強まります。ですから、学校の範囲で子ども達が「競技としてのスポーツ」に触れるのは、放課後のクラブチームにおける活動がほとんどです。

あるいは地理的な環境状況も挙げられると思います。例えばスウェーデン、ノルウェー、デンマークといった北極圏に隣接あるいは含まれる北欧では、夏場になると深夜1時を過ぎても日が落ちませんし、中央ヨーロッパ(西ヨーロッパ)でも夜9時過ぎまで充分な明るさが残っています。単純に子どもたちの活動時間が長くなります。

ヨーロッパでスポーツと言えば今は何はともあれサッカーですが、基本的に体育館のあるところには、何らかのスポーツクラブがあります。それは気ままに愛好者が集まって作られるクラブもあるでしょうし、スポンサーや教育機関、自治体の意向をうけて作られる場合もあります。しかし、基本的にスポーツをしたい地域の人々が集まった組織がクラブの中核をなしているのです。クラブ自体もその地域でどんなスポーツに人気があるのか、どのスポーツの愛好者が集まるのか、指導者が集まるのかによってその種目が異なります。それこそ、バレーボールだけのクラブもありますし、ハンドボールやバスケットボールが盛んなクラブもあるといった具合です。

さて本題のバレーボールに入りましょう。早いところでは、バレーボールを7~9歳頃(あるいはもっと幼少時)から始めるようです。指導者はクラブの若手選手がアルバイト代わりにつとめる事もありますし、ベテランの指導者がつとめることもあり、状況は様々です。いずれにしても各国のルールに従った有資格者やそれに準じるものが指導者を務めます。その練習スタイルを見てみると、まったく自由なものです。あるクラブではソフトバレーを導入し、コートもバドミントンのコートを使って少人数で行います。またあるクラブではまだ小学校低学年であっても一般と同じコート、ネットの高さ、ボールを使って練習します。しかしながらその根底で共通している事は、この時期はと

にかくバレーボールの持つゲーム性を楽しませること、そして子どもたちを飽きさせないことに重きをおいている、ということです。彼らは将来を担うわけですからつまらなくて退屈だとは思わせないように、全ての指導者が苦心しています。(もちろん、それでもドロップアウトや他のスポーツへの転向は頻繁にあります。)いずれにしても、日本の指導者の方が見たら「物足りない」とか「規律がない」とかは思われるでしょう。確かにある程度の年齢層に規律がない事は指導者も頭を痛めているようです。

しかし、概して指導者から特に厳しい技術指導がなされるということはないようです。また、学齢が低ければ低いほど男女混合で活動していることが多い傾向にあるようです。国によってはU-9、U-11といったカテゴリーを作って国内大会を組織しています。その際はネットの高さやボールなど子どもの成長に合わせたルールが選択されているようです。

子どもたちがもう少し成長して中高生くらいの年代(U-18以下)になると、ほぼ全ての国で国内リーグや選手権が組織されてきます。これはFIVBの定めるジュニアのカテゴリーに準じているようです。これらの公式試合では、ほとんどの場合全て一般と同じ規格でプレーします。中学生くらいでも中には190cm以上の選手もいますし、外人選手もいるような一部リーグでプレーする選手も出場します。それに伴って、指導や組織もクラブとしての計画に基づいたものとなります。つまりこの時期には、ゲーム性に親しんだ子ども達がゲームで「勝つ」ために技術を学びます。とはいっても非常にシンプルなもので、確実なパスをするために、強い攻撃を展開するために必要な基本的な技術・戦術です。より高度なことはほとんど指導されません。

同時にクラブは各選手の将来を踏まえた指導を開始し、選手自身も自分がどのレベルを目指してプレーがしたいのか、あるいは他のスポーツへの転向したいのかを考えるようになります。将来性を見込まれた選手はそのクラブのトップ・チーム入りして上の世代との練習や試合を通してトップ・レベルを経験し、セカンド・チームやジュニアのカテゴリーの試合で実践経験を重ねていくのです。

2) 大学におけるVB活動(練習時間・試合形式・指導者等)

世界的に大学生のスポーツ大会であるユニバーシアードがありますが、日本のいわゆる体育会系部活動やアメリカのような大学スポーツの形式はヨーロッパには存在しません。ヨーロッパでは、「大学がスポーツをするところ」という認識は薄いようです。各国によって違いますが比較的自由的な科目を自由な時間で学ぶことができるので、「大学生」という身分にこれといったステレオタイプは存在しないようです。(例えば育児のために10年以上も休学してから復学する学生もしばしば見られます)しかし、近年ではヨーロッパの選手がスポーツを目的として、アメリカの大学

*指導者やクラブチームのない地域、特に大都市地域の子ども達にスポーツ環境を整備するために、日本の部活動の形式による課外活動が注目されているのも事実です。学校の先生が放課後の時間をわずかな報酬を貰って生徒にスポーツ指導をするという方法です。ドイツ・ベルリン地域で試験的に導入されていて、そのカテゴリーの大会も開かれているという話も耳にしています。しかしながら現在のヨーロッパにおいて子どもたちがスポーツに参加する環境はクラブチームに拠るところが主流であるといえます。

に留学するケースも良く見られます。もちろん、スポーツのためではなく勉強もその目的なのですが。アメリカのバレー強豪とある大学はレギュラー選手の半数が外国籍だった事もあります。

ヨーロッパ各国でもあらゆるスポーツの大学選手権が開かれています。バレーボールにおいては、それは大学生がバレーボールをレクリエーション的に楽しむということが主流のようです。その大会のために年間を通してチームを組んでいるケースは稀です。また、国内リーグを戦うクラブチームに大学のクラブチームが存在する事もありますが、大学選手権とはまた別のようです。その大学が所有するクラブチームは、「所有」というよりもむしろ「同居」といったほうが適当かもしれません。名前こそ「〇〇大学クラブ」となっていますが、チームは大学がその施設を利用して独自にスポーツクラブを運営しており、大学のチームもその傘下のチームであるからです。大学の設備はどこも広大な敷地に体育館やプール、トレーニングジムに駐車場と完備されていますが、基本的に大学の授業と、生徒や教職員の福利厚生の使われ方しかしていません。空き時間にそれら施設を有効利用するためにスポーツクラブを運営し収入を得る事、またそのクラブの基幹スポーツを強化する事によりスポンサー獲得を図り、教員による様々なセミナーの開催などによって地域住民に広く開放する事で大学への相互理解・支援を深める事が出来るわけです。ヨーロッパにおいては大学生のバレーボール活動とクラブチームにおける活動は、仮に同じエリアで展開されていても必ずしも一致しないといえます。

3) 一貫指導システムについて

各クラブにおける、最重要な課題が若年層選手の発掘と育成です。特にヨーロッパではどのスポーツもサッカーというお化けスポーツの後塵を拝しており、さらに近年ではバスケットボールやハンドボールの人気も上り、バレーボールの人材確保は年々厳しい状況になっています。ですから若年層、とりわけ高校生くらいのユース世代の強化に取り組むクラブとその国の協会の協力には綿密なものを感じます。もちろんその協力方法にしても各国の特色が現れています。

その例を幾つか述べてみますと、ドイツやフランスなどではその世代のナショナルチーム候補選手を国や地域の自治体が運営するトレーニングセンターに寄宿させチームを組織し最寄の学校に通わせることで、常に練習や行動を共にさせながら、チームとしての育成を実施しています。スイスのように国土の狭い国では一ヶ月に1、2回程度、国内各地から選手が集まって合宿をするケースもあります。一方先に挙げたフランスでは国内各地にナショナルトレーニングセンター（以下、トレセン）が存在し（バレーボールのメインはモンペリエー男子、パリー女子）全土にCREPS（クレップス）と呼ばれるスポーツのエリートを指導する学校があります。そこは寄宿制でスポーツ以外に

もちろん一般教育も施されます。（中学、高校生くらいの年代）

そこでの通常（基本）スケジュールは以下の通りです：

07:30～11:00 授業

11:00～12:30 トレーニング

12:30～13:00 昼食

13:15～17:15 授業

17:15～19:30 トレーニング

→月曜～金曜午前はトレセンでの練習。金曜午後は各所属クラブでの練習。週末はクラブの選手として試合に参加。

トレセン所属選手の年齢層は12歳～18歳。13、4歳で報酬を受ける選手も数多く存在し、この年齢層でも各クラブ間の移籍（金銭）問題が生じることもまま見られます。所属選手のフィジカルトレーニングメニューはナショナルチーム監督・トレーナーより各トレセン担当監督、選手所属クラブ監督へ伝えられます。その基本は、あくまでもナショナルチーム年間スケジュール、メイン大会を中心に組み立てられ、実施されています。トレセン所属選手の活動は、ナショナルチームを最優先にすることが義務付けられていて、その次に所属クラブでの活動とされています。と言うのも、全ての教育費・生活費は国家より支給されているからです。この点は日本での選手の状況と比べてみると、例えばVリーグ選手に対する保障が所属チームからしかなくないで、選手の活動に関する優先権について明らかな違いがわかります。

また他の国々、例えばドイツ（スイス、オーストリアなども同様）では、そのチームで国内リーグに参戦しています。それ以外にもそれぞれのクラブチームにはジュニアチームやセカンドチームがあることが普通です。その中で、将来性や身体能力を見込まれた選手は、年齢に関係なく外国籍選手やプロ選手が活躍するトップ・チームでプレーをするチャンスを与えられます。多くの場合、ジュニア・チームやセカンド・チームは、トップ・チーム監督のコントロール化にあり、時には合同で練習することもあります。そういう環境の中で、常に若い選手に刺激を与えることでそのモチベーション維持を図っているのです。

4) 生涯スポーツとしてのVB活動・ファン獲得の方策・広報活動など

クラブでは、各クラブの組織や資金力によって、その活動に違いがあります。例えば、かつてトップ・チームでプレーしていた選手や本当に楽しむことを目的としてクラブに来ている選手の中でも、年齢が高いカテゴリー（シニア、ベテラン、レクリエーション、ロアジュールなどと呼称）は、どのクラブにも必ずあります。しかし、それとは逆にクラブの資金力の全てをトップ・チームに集中させるためにトップ・チーム以外の一切のカテゴリーを持たず、選手を金銭トレードによってチームを確保・維持するクラブも中にはあります。

どのクラブ、国においてもバレーボール会場への集客やファン獲得は非常に難問となっています。それはやはりサッカーの存在が大きいものであり、それに対するためにもヨーロッパ各国が手を取り合って盛り上げていこうという事で、CEV（ヨーロッパバレーボール連盟）が中心となって、サッカーのそれのように各国間のクラブチームの戦いとワールドリーグの欧州版（ヨーロッパ・リーグ）を軸にTVを中心としたメディア戦略を展開しています。これまで行われてきたクラブ同士の戦いをチャンピオンズリーグ、トップチームカップ、CEVカップという三種類に整備し、いまやヨーロッパはおろか地中海を中心に中東、北アフリカまでもカバーするスポーツ専門テレビ局による中継も行われています。ミクロな面で見ると、それぞれ「おらが町のチーム」といった趣で地元の新聞やラジオ、テレビ局などでは報道されています。

近年ではインターネット環境の向上、そのインターネットを使った情報発信がクラブチームにおける広報の中心となってきています。それまでは新聞報道や限定された対象に対しての情報発信に依存していたときよりも、提供できる情報量が飛躍的に増加したという長所がある反面、インターネットの特性であるその情報を欲している人以外が目にするのが少なくなったという短所もみられます。広報活動の力点の置き所を見誤ったがために、むしろ観客やファンを減らしているクラブチームも見受けられます。しかし、クラブチームからの積極的な情報公開や社会への進出がクラブチームの認知度を高めている点は、日本のバレーボール界が抱えている問題を解決する糸口の端緒になるかも知れません。

3. 強化面について

1) 国内トップリーグについて（組織・期間・試合形式・外国人の出場制限・財源等）

イタリアのプロリーグの成功と、CEVによるヨーロッパクラブチーム間の大会（ヨーロッパ・カップ）開催のおかげで、どこの国においても以前よりもプロ化は進んでいると断言できます。もちろん「プロ」の概念がどこにあるかによって違いますが、クラブから1ユーロでも収入があれば「プロ」であるとするならば、ヨーロッパの各国一部リーグに属するレベルのクラブチームはプロチームといえるでしょう。クラブからの収入で生計を立てる選手もいれば、本職や学業にいそしみながらクラブからはバイト代のような感覚で小額の収入を得る選手もいます。いずれにしても全ての選手、監督を始めとするスタッフはクラブと文書を交わし「契約」します。また、外国人選手の場合はほぼ100%プロ契約といえるでしょう。

現在、多くの国で一部リーグには8~14チームくらいあり、9月中旬以降のリーグ開幕から4月終盤までにリーグ決勝、入替戦がおこなわれます。国によってリーグの進め方も違いますが、基本的にホームアンドアウェーの総当

り2回戦制のレギュラーシーズンを行ない、その後上位チームが優勝をかけたプレイオフ、中間位は順位決定戦、下位チームは下部リーグ上位のチームと上位リーグへの残留・昇格をかけたプレイダウンを行います。（試合方式はその国によって様々で、総当たり形式や当該チームによる2回戦制、勝点制等が一般的です。）

それ以外に国内カップ戦（日本でいう所の黒鷲旗にあたる）があります。カップ戦は基本的に全ての登録チームが出場可能で、通常のリーグ戦が週末開催されるのに対し、平日・水、木曜あたりの夜開催されます。リーグのレベルによって複数のカップ戦がある国もありますが、一般的にカップ戦は完全トーナメントで、サッカーでいう天皇杯のように下部リーグのチームが1回戦を戦い、勝ち進むにつれて上位リーグのチームが出場してきます。準決勝以上を「カップ・ファイナル」と称し一大イベントとして、TV中継も含め開催されている国がほとんどです。例外的なのがイタリア。一部リーグのカップ戦と2部リーグのカップ戦が分かれています。しかしながらヨーロッパのほとんどの国で開かれている方式は同じです。というのもカップ戦優勝チームが翌シーズンのヨーロッパ・カップ出場権（トップチームカップ）を得るからです。

外国籍選手は国によってばらつきもありますが、一般的にはEU枠を除き2人という制限がほとんどです。ヨーロッパでは二重国籍を認めている国もあり、クラブチームの中にはその制度を巧みに利用しているチームもあります。（もちろん合法です）また、近年EU間の選手は外国籍選手とみなさない制度も進み、クラブチームの多国籍化は進んでいます。さらには組織しているジュニアチームの数によって、外国人選手枠がボーナス的に増える制度のある国もあります。

こういった大会の財源はスポンサーからの収入に頼る部分が小さくありません。協会主催の大会であっても「○○リーグ」とか「○○カップ」と冠タイトルをつけています。もちろん各クラブの運営に関しても、ホームコートでのバナー広告、フロア広告からユニフォーム、チームパンフレットに至るまで多くの広告スペースを確保しており、またそれも大企業による大口スポンサーに限定せず、チームを応援してくれる地元の小さな商店やレストランなどもスポンサーとして広告が掲出されているのです。（もちろん日本の実業団のように大企業一社でチームのスポンサー＝オーナーとなる場合もあります。）

また、多くのクラブチームでは地元自治体からの金銭的援助を受けていて、（フランスでは平均してクラブの年間予算の5割以上が自治体からの援助によるものだそうです。）クラブの経営維持の大きな助けとなっています。いわば、自治体のスポーツ振興策のアウトソーシングとしてのクラブ経営、という側面も持つのです。

2) ナショナルチームについて（スタッフの選出/選手の選抜/強化の拠点/財源/海外遠征等）

私が長らく指導者としての期間を過ごしたフランスをメインにご説明いたします。もちろん当時と今とでは多少状況が変化している事をご了解ください。しかし、大筋では差異はありません。

ナショナルチームのスタッフは、原則として国内の最高指導者資格・F3*を取得している者の中から選出されます。(指導者資格は上から順にF3・F2・F1となっています)。F3資格取得者の中で、特に優秀と判断された指導者は各地域に設けられている前述のトレセンにて、各カテゴリーのナショナルチームの指導に当たります。フランス代表チーム(各カテゴリー)のスタッフは、基本的にその中から選出されます。

フランス代表チームのスタッフミーティングは、年3～5回定期的に行われます。登録各選手の体力的、技術的、心理的テスト結果もその場で検討され、各自へ向けての指導方針がここで設定されます。このミーティングにより一貫した指導理念が形成され、それを基に一貫指導が実施されているのです。

確立した指導者資格制度を持つサッカーと同様、その資格取得から更新、また各資格に付与される活動可能範囲についてなど、資格制度が充実しています。フランス国内リーグの全てのカテゴリーにおいて指導する場合は、この国内資格の取得が必要となり、特にプロリーグ(PRO A/B/F)や1部リーグ(N1)では、その最高ランクであるF3資格の取得は最低条件となっています。仮に国外から指導者を招聘する場合にはF3に相当する資格(FIVB公認コーチレベル3もしくは2)の保持が求められます。

「一貫指導システムについて」で紹介したように、フランスでは各地に点在する地域トレセンにて、選考された選手が集められます。そこで選手たちは寄宿生活をし、勉強とバレーボールに励む事になるのですが、その中でも優秀な選手はナショナルトレセンに登録されます。ナショナルトレセン所属選手の中(約60名)から、最終的に18名～12名がいわゆる代表チームとして選出されます。原則として、ナショナルトレセン所属選手から選抜されますが、例外として家庭の事情などでナショナルトレセンへ入れない選手もちろん実力次第で選ばれます。シニア以下全てのナショナルチームと名のつくチームがこのトレセンを基点に練習や合宿を行います。大きな国際大会に参加するA代表だけでなく、国際親善試合などをこなすB代表も組織され常にナショナルチームはその活動時期はたくさんの人数の選手が活動しています。

トレセンには一般的に13歳くらいから大学生くらいまでの年齢の選手がそれぞれのカテゴリーに所属していま

す。年齢的にここを卒業した選手は自分の力で次の進路を決めるのです。多くは仕事や勉強をしながらクラブと契約しバレーボールを続けていき、プロになるチャンスを求める選手、まったく別の道に進む選手と様々です。

4. 日本の普及発展に対する方策(提言)について

第一に教育的指導と専門的指導(選手が自己管理できる指導)の区別を明確にすることが必要だと考えます。将来的に選手が独り立ちした際に自己管理が出来るようにするための指導となります。

一般的なヨーロッパと日本の一番の違いは、この教育的指導と専門的指導を行う時期の違いにあると考えられます。ヨーロッパでは13歳～15歳から専門的指導の導入が始まりますが、もう既にこの年齢帯は(フランス代表候補選手レベルでは)自己管理、自己分析、自主トレーニングを行っています。つまり、教育的指導の基礎指導がほぼ終了しており、個々の選手に対する専門的指導が指導者と選手の間で個人対個人という立場で行われているのです。

反面、日本ではほとんどのカテゴリー(年代)において不変的な教育的指導が行われていると言わざるを得ません。指導者が選手に上の立場から指導を与えるという図式です。きつい言葉になりますが、現状では日本における指導は、「手取り、足取り」教授する方式なのです。従って、選手は指導者からの指導に従うだけとなってしまい、従う選手こそいい選手だと評価される土壌がまだまだ残っていることは否定できません。もちろん、チームに従い行動する事は選手として必要な事ですが、プレーをあらゆる局面に即時に対応する個人能力も求められるのです。

第二に体力的・心理的な面の強化対策の点です。第一のポイントで指摘させていただいたことと深く関連いたしますが、日本の体力的・心理的な面の強化対策は諸外国のそれと比べ、非常に立ち遅れているといわざるを得ません。選手が自ら考え、分析し、管理するという教育的指導部分が未熟であるために、選手にとって常に指導者の指導が「あって当然」となってしまっており、困難に直面した時に、自ら創意工夫を凝らして解決するということができないでいる状況が見受けられます。体力トレーニングに取り組んでも、そこに向けられる意識や工夫が選手自身のものでない以上、十分な効果は期待できません。選手の積極的な取り組みを引き出す指導、専門的指導を選手対指導者間に対等の立場が確立できない限り、日本選手の国際的なトップレベルへの成長は難しいと考えられます。

また、近年全日本の監督に外国人を登用する意見が大きく語られています。それは、今の日本にないものを取り入れるという面からいえば効果が期待できます。しかしながら、日本の指導者が優秀ではないということではありません。日本にはこれまでの輝かしい歴史がありました。「それは過去の事だ」という向きもありましようが、その歴史において間違いなく日本のバレーボールは世界のバレーボ

*フランスにはナショナルトレセンの他に、地域トレセン(Regional Training Center)がある。これらのトレーニングセンターでの指導者は、F3資格を取得していなければならない。

ールを変えてきたのです。その事実は我々バレー界に身を置く日本人全てに何らかの影響を与えているはずですが、

日本人の指導者ならば世界のバレーボールを変えられる、私はそう信じています。アトラクティブかつ芸術的なバレーボールへの進化には日本の技術が必要なのです。

例えば日本人指導者がオランダの男子チームを指導したとします。オランダはガリバー軍団として世界でも有数の強豪です。間違いなく技術的には世界を変えるバレー技術が出来るでしょう。しかし、果たしてそれで世界を制する事が可能でしょうか。私は心理的な面、体力的な面においてそれは難しいと思います。裏返していえば、心・技・体の心・体の強化策の更なる研究と専門的な取り組みが急務の課題であり、それが成功すれば日本が世界のヒノキ舞台に再び立てることはおろか、世界のバレーボールを刷新する第一歩となるでしょう。

私の過去25年間における海外での指導、またFIVBの事業における世界32カ国での貴重な経験の中でいつも感じたことは、日本を出国するとなぜかパワーを世界各国で感じ、その反面技術の未熟さを感じることです。「パワーを技術へ」また「技術向上のためにパワーを」というフレーズがバレーやスポーツのみならず、一般社会のあらゆる面においても感じられます。これはやはり何か今後の発展のヒントではないでしょうか。

"Nothing is to be impossible."

末筆ながら、今回の機会をお与えくださった枳堀会長を始めバレーボール学会の皆様、編集委員長である柏森先生と本機関誌関係各位に感謝の意を表します。

5. イタリアのバレーボール事情

—セリエAを中心に—

真鍋 政義 (大阪体育大学大学院)

1. はじめに

1999年、私は「イタリア・セリエAでプロ選手としてプレーする」という夢が叶いました。しかし、私が海外のクラブでプレーしてみたいと考えたのは、その10年以上も前(1989年)の話でした。

前年、日本リーグ(現Vリーグ)で優勝した新日鐵(当時の所属)は、アジアクラブカップでも優勝し、イタリアで開かれた世界クラブカップ選手権に出場することができました。その大会で新日鐵は5位に終わりましたが、私はベストセッター賞をもらい、地元記者から「イタリアでプレーしてみる気はないか?」という質問を受けたのです。そのときはまだピンときませんでしたが、その年のヨーロッパ選手権でイタリアは優勝し、翌年の世界選手権では初優勝したのです。

当時、日本はまだ世界と対等に戦えると思っていました

が、実際、90年代に入ると日本は世界での順位が下がり、逆にイタリアはプロリーグに世界中の一流プレーヤーが集まりはじめ、個人レベルと国のレベルが急速に上がり、瞬く間に世界1の国に押し上がったのでした。私も参加した1988年に行われたソウル・オリンピックでは、イタリアと日本は順位決定戦で10位を争ったので、余計にその成長の土台となったセリエAに、私自身、興味を持つようになりました。

しかし、時期を同じくして私は新日鐵の監督(選手兼任)という立場になったため、その夢を封印することになりました。しかし、Vリーグが誕生し、日本でも外国人選手が認められると、彼らやそのエージェントから聞く話により、その思いは一層強くなり、1999年6月、監督の座を後輩の植田辰哉君(現・全日本監督)に引き継ぐと、新日鐵を退社し、36歳の私は夢を追いかけ、念願のイタリア行きの切符を手に入れたのでした。ここでは、わずかに半年余りでしたが、イタリアでの経験を織り交ぜながら、「世界最高峰」と呼ばれるイタリア・セリエAの様子をまとめさせていただきます。

2. セリエAのシステム

1) セリエAの概要

セリエAは大きく分けて、セリエA1(14チーム)、セリエA2(16チーム)、セリエB(約120チーム)、セリエC(アマチュア)と段階によって分かれています。日本で言うならばA1はVリーグ、A2はV1リーグ、Bは地域リーグと言った形でしょうか。またこの他には、コッパイタリアと呼ばれるカップ戦や、前年度のヨーロッパ各国のリーグチャンピオンで行われるチャンピオンズリーグ、上位国を集めたCVEカップ、ヨーロッパカップなどがあります。通常、私たちがセリエAと解釈しているのは、リーグ戦のことです。

セリエA、A2ぐらいまではプロ契約ですが、現在、イタリアは景気がよくなく、AでもA2でも賃金の支払いが滞ることが多いようです。Bクラスになると、他の職業やバイトをしないと生計が立てられないようです。A、A2についてはスポンサーによってなんとか支えられている状況です。

セリエAでは必ずジュニアチームを持つことが義務づけられています。かつてはベンチ入り12名のうち、2名はジュニア選手を必ずベンチ入りさせることを義務付けていました(現在は無い)。ただし、各チーム1軍は12名ピッタリで余剰人員はほとんどいません。故障者がいたならば、ジュニアチームから吸い上げ補充します。

18歳までのジュニアチームは、学校に通う地元選手で構成されています。勿論、素材のいい選手はスカウトし転校させ、地元の高校に通わせるケースもあるようです。したがって、アマチュアですが1軍の試合に出た場合は報酬が発生します。在学しながらトップチームに昇格し、プロ

契約をする選手もいます。また、ジュニアリーグのようなものがありますので、ユニフォームなどの諸経費はチーム持ちです。

さらにジュニアからトップに昇格したものの、12名以上の余剰人員になる選手が出た場合は、A2やBクラスにレンタル移籍をさせるケースがあります。そこで試合経験を積ませ、プレーが上達したらレンタル元のチームに戻す方式があります。その場合にはレンタル代をレンタル先から得ることもでき、経験も積ませると、レンタル元にとっては一石二鳥なのです。

セリエAあたりになると、ジュニアから辞めるまで同じチームでプレーするケースは少ないのですが、以前、加藤陽一選手が在籍したトレビソのチゾーラ選手（イタリア代表）は、ジュニアからずっとトレビソ育ちで、地元の英雄としてより一層の人気を誇っています。

2) シーズンについて

シーズンは、9月から5月中旬まで（国際試合の関係で開幕が前後することもあります）で、世界選手権やワールドカップなど日本を中心に行われる大きな世界大会は11月にありますから、そのときはリーグを中断して国際試合を優先します（以前はイタリアが国際的に弱かったときは、国内シーズンを優先していたようですが、現在は確固たる地位を築いたイタリアチームを誰も予選で負けることなど考えるはずもなく、最初から中断する予定を組み入れているようです）。

3) 参加チームと組み合わせ

ここではセリエA1を中心にお話しますが、A1は14チームで形成されています。この14チームで週1回のペースで試合（ウィークエンド中心）を行います。イタリアでは各クラブとも地域に密着していて、クラブ名は地域の名前とスポンサー名（例えば加藤君が以前いたトレビソは、SISLEY TREVISIOはシスレイという洋服メーカーがスポンサーでトレビソというのが都市名です）が一つになっています。その14チームがホーム&アウェイで2回戦総当り戦を行います。

その合計26試合の結果で、上位8チームがプレーオフと呼ばれる決勝ラウンドに進出します（日本で言う四強リーグでしょうか）。その組み合わせは、1位対8位、2位対7位、3位対6位、4位対5位の対戦となっています。先に2勝したチームがセミファイナルに進みます。準決勝も同様の方式で行い、最後のファイナル（決勝戦）は、先に3勝したチームが優勝するシステムになっています。

また、下位2チームは自動的に、A2の上位2チームと入れ替わります。

選手構成は、イタリアの選手が中心ですが、EU諸国加盟の選手は3名まで（それ以外は1名）の枠で外国人選手を加入させることができます（以前はEU加盟国であれば無制限という時期もありましたが、サッカー同様、国からの規制がかかったようです）。

4) その他

「コッパイタリア」

コッパイタリアはトーナメント方式でイタリア1を決める大会（日本の黒鷲旗に当たります）で、毎年2月末にファイナルが行われますが、その試合は国民的行事で会場自体が一つの大イベントとして大変盛り上がります。

3年ぐらい前まではサッカーの天皇杯のように、セリエCからセリエAまでのトーナメント方式（無論、セリエAのチームはシードでベスト16からの登場でした）で長い時間をかけて行われていました。ところが昨年度ぐらいから方式を変え、セリエA、A2などレベルごとのトーナメント戦になりました。詳しいことはわかりませんが、過密な試合日程を緩和させるためだと思います。

セリエAでは12月のクリスマス休暇前のリーグ戦の8位までのチームのトーナメント方式です。1位対8位、2位対7位、3位対6位、4位対5位の組み合わせで、今年2月23日、24日に1回戦、2月26日、27日に準決勝、決勝を集中開催しました。

「ヨーロッパの大会」

3つの大会に分かれていて、

- ①チャンピオンズリーグ（各国のリーグチャンピオンが集う）
- ②CVEカップ（カップ戦やリーグの各国上位国が集まります）
- ③ヨーロッパリーグ（登録制の参加クラブカップです）

ヨーロッパ連盟が主催している3大クラブカップですが、毎週水曜日ないし木曜日に開かれます。

ヨーロッパ各国が近年力を付けている理由として、この大会の存在が大きいと思います。現在、ヨーロッパではほとんどの国でユーロが使えますし、日本と違いヨーロッパは大陸続きですから、あまり苦にならずに移動もできます。日本に置き換えると北海道がロシア、東北がノルウェー、東京がフランス、イタリアが大阪、スペインが広島…のようになるのではないのでしょうか。実際、リーグが盛んなフランス、イタリアからはヨーロッパ全体の移動を2週間程度でカバーできます。これだけ各国で切磋琢磨できる環境があれば、自然にレベルアップできるに違いありません。

では、イタリアのチャンピオンチームの日程を例にとって、そのハードさを探ってみましょう。

昨年度（2003→2004）セリエA優勝のトレビソの今シーズンのこれまでの日程と今後の予定です。（表1）

これにプラスしてリーグでベスト8入りすれば、準々決勝戦（5試合で3戦勝ったほうの勝ち）、準決勝戦（同）、決勝戦（同）が加わり、最大15試合が加わります。また、これは公式戦だけでセリエA開幕前には各チーム、プレシーズンマッチを5～10試合、クリスマス休暇時も数試合行いますから、合計60試合前後になるわけです。

このような環境で、セリエAのクラブによっては、1

表1

No.	日時	大会名	ホーム&アウェイ	勝敗	対戦相手
1	2004. 9. 26	セリエ A	ホーム	○	ベローナ
2	2004.10. 3	セリエ A	アウェイ	×	ターラント
3	2004.10.10	セリエ A	ホーム	○	モンテキャリィ
4	2004.10.12	スーパーイタリア		○	クネオ
5	2004.10.17	セリエ A	アウェイ	○	トレンティーノ
6	2004.10.24	セリエ A	ホーム	○	ラベンナ
7	2004.11. 4	チャンピオンズL	アウェイ	○	アルメリア (スペイン)
8	2004.11. 7	セリエ A	アウェイ	×	ピアツェンツァ
9	2004.11.14	セリエ A	ホーム	○	ヘルージャ
10	2004.11.16	チャンピオンズL	ホーム	○	インスブルック (オーストリア)
11	2004.11.21	セリエ A	アウェイ	○	バレンティーナ
12	2004.11.24	チャンピオンズL	アウェイ	×	バーオノ (セルビア・モンテネグロ)
13	2004.11.28	セリエ A	ホーム	○	ジアドルコッテ
14	2004.11.30	チャンピオンズL	ホーム	○	ツアーVB (フランス)
15	2004.12. 5	セリエ A	アウェイ	×	バドバ
16	2004.12. 8	チャンピオンズL	アウェイ	×	ツアーVB (フランス)
17	2004.12.12	セリエ A	ホーム	○	クネオ
18	2004.12.14	チャンピオンズL	ホーム	○	バーオノ (セルビア・モンテネグロ)
19	2004.12.19	セリエ A	ホーム	○	マチェラータ
20	2004.12.29	セリエ A	アウェイ	○	モデナ
21	2005. 1. 5	チャンピオンズL	アウェイ	○	インスブルック (オーストリア)
22	2005. 1. 9	セリエ A	アウェイ	○	ベローナ
23	2005. 1.16	セリエ A	ホーム	○	ターラント
24	2005. 1.19	チャンピオンズL	ホーム	○	アルメリア (スペイン)
25	2005. 1.23	セリエ A	アウェイ	×	モンテキャリィ
26	2005. 1.30	セリエ A	ホーム	○	トレンティーノ
27	2005. 2. 6	セリエ A	アウェイ	○	ラベンナ
28	2005. 2. 9	チャンピオンズL	アウェイ	○	ホットバレー (オーストラリア)
29	2005. 2.13	セリエ A	ホーム	×	ピアツェンツァ
30	2005. 2.16	チャンピオンズL	ホーム	○	ホットバレー (オーストラリア)
31	2005. 2.20	セリエ A	アウェイ		ヘルージャ
32	2005. 2.23	コッバイタリア			トレンティーノ
33	2005. 2.26	コッバイタリア			準決勝
34	2005. 2.27	コッバイタリア			決勝
35	2005. 3. 3	チャンピオンズL	アウェイ		ベオグラード (ロシア)
36	2005. 3. 6	セリエ A	ホーム		バレンティーナ
37	2005. 3.13	チャンピオンズL	ホーム		ベオグラード (ロシア)
38	2005. 3.20	セリエ A	ホーム		ヘルージャ
39	2005. 3.26	チャンピオンズL			準決勝
40	2005. 3.27	チャンピオンズL			決勝
41	2005. 4. 6	セリエ A	ホーム		バレンティーナ
42	2005. 4.13	セリエ A	アウェイ		ジアドルコッテ
43	2005. 4.20	セリエ A	ホーム		バドバ
44	2005. 4.26	セリエ A	アウェイ		クネオ
45	2005. 4.31	セリエ A	アウェイ		マチェラータ
46	2005. 5. 3	セリエ A	ホーム		モデナ

シーズン60試合も試合を消化 (Vリーグのチームは30試合前後) するわけですから、精神的にもタフで試合の中で技術を磨いていくことができるわけです。

また、大会ごとの賞金はどこにも明記されていないのではありません。(多分、わかるのですが私の資料には書いていません)。年俸のこともあるのでリーグ側の作戦なのかわかりません。

3. セリエ A の現実

1) プロ意識について

私がセリエ A のパレルモと契約したのは、1999年の8月でした。パレルモはシシリア島のチームで、スポンサーは建設会社でした。9月から練習に参加したのですが、初めての練習のときの緊張感はいまだに忘れられない思い出です。そのとき感心させられたのは、ナショナルチームな

どで8名しか選手がそろわなかったのにも関わらず、4対4のゲームをすると、真剣そのもので、決して妥協せず、ミスでもしようものならば本気で仲間を怒って、悔しがるのです。日本でこれぐらいの人数でやった場合、「そろってないから…」とどこか気持がこもっていない部分が見られがちですが、そのプロ意識の高さに驚かされました。

次に、チームスタッフはセリエAクラスだと、チームマネージャー（チームの運営を管理する人・日本で言えばバレー部長でしょうか）、監督、アシスタントコーチ（2、3名）、トレーナー（日本はフィジカルとケアのトレーナーが一緒の場合がありますが、向こうは明確に分かれています）。トレーナーについては、選手によって個人トレーナーを雇うこともあります。運営経費についてはチームマネージャーが管理し、現場は監督がまとめます。

食事や体重管理は非常に厳しく、シーズンイン前にフィジカルチェックがあり、それに基づいて個人のメニューが決めます。当然、体重オーバーならば食事の制限があります。食事についてはトレーナーが、試合等に合わせ、カロリー計算や何を食べていいかということを示してきます。また、トレーニングメニューも、肉体的にどの部分を重点的に鍛えたいのか（加藤選手は腰痛が持病だったので、体幹を鍛えるようなメニューを組まれたようです）。故障を抱えている選手は特にトレーナーの指示を受けながらリハビリに務め、試合をこなしていくわけです。

2) 言葉の問題について

私が一番悩んだのが言葉の問題です。イタリア語はほとんど喋ることができず、英語も日常会話なら何とか…という程度でした。私はセッターでしたが、やはりコミュニケーションが図れなければ、まったく仕事になりません。日本のVリーグのように外国人選手に通訳が付くようなことはありません（これは日本だけです）。ミーティングはイタリア語（イタリアですから当然ですが…）で行われます。理解できない私は、イタリア語を理解できるヘルド（オランダのアトランタ・オリンピック金メダリスト）が、僕のために英語に訳してくれるのですが、やはりそれも半分ぐらいしか理解できません。

イタリア以外の国から来た選手は、最初は苦勞すると聞きます。現実に国際舞台では活躍しているのに、セリエAでは数字を残せず、他国のリーグへ去っていく選手も少なくありません。それはやはり言葉の問題です。先ほども言いましたが、英語でミーティングをしたり、会話をすることはほとんどありません。あくまでもイタリア人が主体という考えに基づいているからでしょう。したがって、1年目は不振でも、慣れだして2年目、3年目で活躍する選手も多いようです。

3) 年俸について

セリエAの平均年俸は800万円位と言われます。一番もらっているのはバビで、4000万円と言われています。ただし、ナショナルチームの選手や名前のあるスター選手

は、個人的なスポンサー契約やコマーシャル等がありますから、総収入は倍以上に膨れあがります。10年前は年俸が高騰して、1億円を越す金額をもらっていた選手もいたようですが、イタリア経済の悪化にともない、現在のレベルに落ち着いているようです。

また、給料未払いやピアツェンツァのようにセリエAのチームが潰れて合併したケースや給料未払で裁判問題になっているケースも近年目立ちます。

余談ですが金額だけで言えば、ヨーロッパでいま一番いいのはロシアリーグと言われています。富豪たちがチームオーナー（サッカーのチェルシーのオーナーのようなものです）となり、いい選手は5000万円クラスとなっているそうです。今リーグはロシアのほとんどの選手が母国に戻り、イエルトツェン（オランダ、元松下電器）やグルビッチ（セルビア・モンテネグロ、元堺ブレイザーズ）のように日本でも有名な元セリエA選手もロシアリーグに移籍しています。

4) ステータスについて

それでも毎年他国の一流選手がセリエAに来るのは、レベルの高さからイタリアでプレーすることが、選手たちの憧れであり目標であるからです。だから、ヨーロッパの選手たちはセリエAを目指し、バレーの技術を磨き、条件のいいクラブに移籍を重ね、セリエAを目指します。

バスカル（スペイン）はその良い例でしょう。彼はスペインの下部組織から始まり、フランス、イタリアと段階を踏んで憧れのセリエAにたどり着きました。今でこそスペインは、国際舞台でも上位に数えられますが、彼がデビュー当時は世界的にはまったく無名。そんな実績のない国の選手が、セリエAで活躍するのは並大抵のことではなかったはず。そんな彼も今ではイタリア人誰もが認めるセリエAのトップスターです。

5) スポンサーについて

イタリアの場合、スポンサーが各クラブの命です。私がいた頃の話ですが、リーグで最も人気のあったモデナ（ジャーニがいました）でさえ、観客動員は平均2,160人です。チケット代は日本円で1,000円から3,000円ですから、その収益は3千万円強です。そこにグッズの売り上げなどを加えたとしても、予算の半分にも及びません。人気選手を抱える年間予算が5億円程度ですから、独立採算には程遠い状況です。ほとんどはスポンサーに頼る状況なのです。

したがって、A2クラスになると有能な外国人選手を雇うだけの予算は取れず、簡単には上位に上がることはできません。

6) レベルの高い試合について

リーグ戦はどの試合も世界選手権が行われているような内容です。イタリアを中心に、ブラジル、セルビア・モンテネグロ、オランダ、ドイツ、ロシア、スペイン、アメリカ、アルゼンチン、キューバなどのナショナルチームの選手が14チームに分かれて戦っているのですからそれも当

然です。

その中でブラジルの速いバレー、アメリカの組織バレーなどを学び、各国のナショナルチームに持ち帰り、世界の最新の技術がイタリアから発信されるわけです。

4. 日本の普及発展に対する方策について

ここでは国内リーグを活用して日本の強化策にいかにつなげていくかに焦点を絞って具体案を述べたいと思います。

1) Vリーグ試合数の増加

今シーズンからVリーグは試合数を増加しました。しかし、どんなに多くても30試合超です。イタリアに比べると約半分です。その一方で11月から3月までの集中開催となり、選手の疲労度はイタリアとさほど変わりません(故障者の増加につながりました)。

基本的にFIVBでは国内リーグシーズンを10月15日～4月30日と明記していますが、イタリアなどヨーロッパ諸国はそれよりも早く始まり、遅く終了しています。できればシーズンを長期日程にし、リーグ戦は週1試合で40試合ぐらいまで増やすことで、選手にもっと試合経験を積ませることが必要です。ヨーロッパ諸国よりも順位が低い日本がその国よりも試合数が少ないことは滑稽です。

クリアすべき問題点は、日本の社会構造が壁となります。日本は4月入学、入社、3月卒業と社会がそういうサイクルになっています。4月以降もリーグを続けるとすれば、企業スポーツの日本では成立しない可能性があります。

2) 海外との積極的交流

イタリアをはじめ、ヨーロッパ諸国は大陸でつながっているということもあり、積極的な交流戦を行っています。日本は厳しいことに島国です。しかしながら、韓国や中国、チャイニーズ・タイペイなどは2時間～5時間ぐらいで移動することができます。韓国はこの2月20日からプロリーグを開幕させましたが、アジア諸国のクラブのカップ戦を作ることが強化につながります。大きな国際試合も日本で開催され、Vリーグでも外を見る機会がないとなると、選手個々への刺激が不足します。

まず、日本・中国・韓国のクラブのカップ戦をリーグ戦中に組み入れ、アウェイ洗礼や異国の食文化の違い、環境の変化での試合を行い、選手の精神的鍛錬を図ります。また、現在、外国人枠は1名ですが、アジアの門戸を広げ、アジア枠なるものを作ることで各チームのレベルアップを図りたい。例えば、日本のチームに韓国やイランの選手を入れる。それにより、激しいポジション争いをチーム内で

展開させます。

クリアすべき問題点は、まず企業スポーツということ、海外への旅費の負担、また外国人選手を拒否している企業と、受け入れた企業の格差が大きくなることです。しかし、航空会社へのスポンサー(韓国プロリーグには大韓航空が参入している)への働きかけ、また、アジア選手については社員としての採用義務(プロ登録ではなく、社員として入社させる)などで解決を図りたい。

3) Vリーグのプロ化

何と言ってもVリーグのプロ化を推し進めることが必要です。社員選手は、優勝しても最下位でも給料は上下しない。やはり、勝つことで収入を得て、負けることで減俸につながる。Jリーグは、反対論を論じ、参戦したい企業を募って、独立採算のクラブを育てました。会場の収容人員の問題から始まり、さまざまな問題はたくさんあります。

韓国はスーパーリーグ元年の参加チームは4チームです。その中でバックアタックのラインのさらに50cm後ろから打って決まると2点入るなど、独自のルールも作成し、バレーボールのプロリーグを楽しんで、そして認知してもらおうと必死です。日本も独立法人(中間法人)に4月から移行します。それをきっかけに十分に検討し、移行することを願います。

5. おわりに

私はわずか半年間のプレーでしたが、その後、加藤陽一君がテレビソに入団し、セリエA優勝の経験もしました。現在もベルギーで活躍中です。しかし、イタリアでの日本バレーへの認識は厳しいものがあります。私が契約にこぎつけたとき、前年の世界選手権を例に出されて、「日本は世界で15位のチームだから…ね」と、年俵交渉のときに突かれました。まだ、私はオリンピックの出場キャリアが評価されて、平均年俸ぐらいで契約することができました。

世界に対抗していくためには若い世代がセリエAを中心とした海外に目を向けることは必要なことだと思います。しかし、現在日本のナショナルチームは、世界ランキングでも20位前後です。海外に出て行くためには、相当の覚悟が必要です。日本にいれば、Vリーグの中でサラリーマン選手として、勝っても負けても給料が下がることがない安定した生活があります。その環境を捨ててでもやろうという強い意思があるかどうか。逆にそのような覚悟がある若者たちが出てきて、積極的に海外へ挑戦するような選手が出てくることを期待します。